
タ・ケ・ル

高遠響

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

タ・ケ・ル

【Nコード】

N1190Y

【作者名】

高遠響

【あらすじ】

タケル小学校6年生。サッカー好きの勉強嫌い。なんてことはない少年だが、彼には特殊な能力があった。彼はテレパスリスト。親友のトーマだけがそれを知っている。

ある日タケルは琴音という美少女と出会う。どうやらこの美少女、訳ありのようだ……。

タケルとトーマと琴音。三人の少年少女のひと夏の冒険物語。

祭りの夜に<t;1>

1. 祭りの夜に

「じゃあ、お楽しみの通知表を渡すぞお！」

担任の成田先生が大声を張り上げた。途端に六年一組の教室の中は「え〜」とも「ぎゃあああ」とも「はあああ」ともつかぬような子供たちの声で満ちあふれた。

「夏休みだからって浮かれて遊びまわっている場合じゃないぞお。この通知表をありがたく受け取って、夏休みの過ごし方をよおく考えるようにな！」

ひよろつとしていて銀ぶち眼鏡の成田先生はにやにや笑いを浮かべている。いつもにこにこしているのはいいが、こういう時は憎らしい。

成田先生は名簿順に名前を呼び始めた。

タケルは机の上に顎ゝあごゝを置くと、どんよりとした顔で前を見る。

「川上タケル！ おい、タケル！」

成田先生の非情な声が飛んでくる。力行なんてすぐ回ってくるから大嫌いだ。

タケルは力なく立ちあがると、見るからに嫌そうな顔でのろのろと前に出た。

くすくすと女子の笑い声が聞こえる。

「見る前からそうがっかりするなよ。頑張ったよ、うんうん、体育はな」

成田先生は笑いながら通知表を目の前に差し出した。

「二学期は運動会があるじゃないか！ お前の華麗な走りを見せてやれ！ しつかり夏休みに鍛えとけよ。宿題をしてからだけだな」

「あ〜〜もう！」

タケルはひつたくるよう通知表を受け取ると、どすどすと大股で自分の席に戻って勢いよく座った。また女子がくすくす笑う。二つ折りの通知表を少しだけ開けて、顔を突っ込むようにして見る。

「……………」
体育は全項目「よくできる」だ。これは予想通り。問題はその他だが……………」

無情にも五段階のど真ん中から下がずらりと並んでいる。社会に至っては全ての項目が一番下と来ている。予想通りと言えば、予想通りではあるのだが……………」

「……………まずい。これはまずい」
パタンと通知表を閉じると、机の上に置き、その上に頭を乗せた。教室のそこかしこから、タケルと同様の焦りの“声”や、嬉しそうな“声”が波のように聞こえてくる。

やった！ これでゲームソフト、ゲットだ！

わあああ、こんなの見せたら母ちゃんに殺されるかも。

やばい！ やばすぎる！！

びみよくな内容だあ……………。塾でなんて言われるかなあ。

タケルはその“声”をぼんやりと聞きながら大きなため息をついた。多分俺が一番やばいんじゃない？ 心の中でそう呟く。

軽やかなチャイムが鳴り響き、教室の中のざわめきは一層大きくなった。

「なんだかんだ言っても、小学校最後の夏休みだ。皆、楽しんでこいよ。事故と病気には十分気をつけてな！ 起立、礼！」

成田先生の言葉を合図に教室のにぎやかさは最高潮に達した。

タケルはやけくそのようにカバンの中に通知表を突っ込んだ。そして勢いよく椅子を机の中に入れた。

「タケル！ どうだった？」

クラスメートがばんつと勢いよくタケルの背中を叩く。

「いつてえ！」

タケルは大げさに痛がって見せた。

「骨折れた！」

「お前の骨がこれくらいで折れるか！」

友人はけらけらと笑う。

タケルは体育だけが取り柄というだけあって、それほど大柄ではないが猟犬のようにしなやかで軽やかだった。確かに背中をはたかれたくらいで骨が折れるはずもない。足も速いので、クラスの男子の中では一目置かれている。地元のサッカークラブに入っていて、レギュラーとして活躍していた。日に焼けた顔に、強い生命力を感じさせる瞳が印象的な少年だった。

「で、どうだったってば」

「聞くな……」

タケルは顔をしかめて見せた。友人はにやにや笑いながら頷いた。「いいんじゃない？ 天は二モツを与えずって言うじゃん」

「なんだよ、それ」

「それで勉強まで出来たら、嫌われてるってこと」

「バカってことじゃねーか！」

「そうとも言うな。じゃあな！」

友人はそう言いながら走って教室を出た。その後ろ姿にタケルは苦笑いしながら手を振った。そして、教室の一番奥の席に向かって叫ぶ。

「トーマ！ 帰ろっぜ」

「うん」

自分の席で荷物をまとめていた山本冬馬、トーマはゆっくりと立ち上がる。小柄で色白で眼鏡をかけているトーマは、タケルとは対照的に、見るからに秀才といったところだ。実際、トーマの成績は恐らく学年で一番に違いないとタケルは信じている。タケルを始め、クラスの何人かの男子はわからない問題があるとトーマに教えても

らう事にしている。トーマの教え方は先生よりも上手いというのがもっぱらの評判だ。わかりやすいし、根気よく教えてくれるし、なによりもうれしいのは、自分の親のように「なんでこんなのがわからないの！」などと言わないところだ。成田先生はトーマの事をプチ孔明などと呼んでいる。ちなみに孔明というのは三国志というやたら長い物語に登場する中国の賢人である。それくらい賢いのに、それを鼻にかけることなくいつもニコニコしているところが、いい。意外な事にトーマはタケルの親友なのである。見た目も中身もまったく違うのに、しょっちゅう一緒にいるので、二人は「オセロ」とクラスメートから呼ばれていた。勿論、黒い方がタケルで白い方がトーマだ。ちなみにオセロをトーマとタケルがすると、ほとんどパーフェクトでトーマが勝つというのは言うまでもない。

「なあなあ、トーマ」

タケルは少し声をひそめる。

「天は荷物を与えずって何？」

トーマは一瞬目を見開き、それからパチパチ瞬きした。

「天は荷物って……それを言うなら『天は二物>にぶつくを与えずだよ。秀でた才能をいくつも持つてるモンじゃないってこと』」

「……やっぱりバカってことじゃねーか」

タケルが唇を突き出して不服そうにぼやくので、思わずトーマは笑いだした。

「運動神経いいって充分だと思うけど」

「どーせ俺は筋肉バカですよ。脳ミソの代わりに、カニミソが詰まってるんだい」

タケルはむくれた。

「カニミソ……って」

「高級なんだぞ、どうだ参ったか」

無意味にいはるタケルを、トーマはさらりといなす。

「……なんで高級か知ってる？ ちょっとしか入ってないからだよ」「やっぱりバカってことじゃねーかあああー！」

タケルはトーマの肩をつかんでゆさぶった。

「あはは……ごめんごめん。帰ろ」

「おっ」

二人は並んで教室を出た。

校舎の外は一瞬めまいがしそうなくらい暑い空気と日差しと、セミの声であふれている。

学校の外の道路は家へ向かう子供でいっぱいだ。皆足取りも軽くうきうきしている。

「あゝ、やっと夏休みだよお」

タケルは太陽を見上げて伸びをした。ようやく教室に閉じ込められる時間から解放されると思うと、青空のように爽快な気分だ。タケルにとって人のたくさんいる空間に閉じ込められるという状況は拷問以外のなにものでもない。それには勉強嫌いという理由とは別に、ある特別な事情があるのだが。

「今日の夜、泊まってもいいって?」

強い日差しを避けるように黄色い帽子を目深にかぶっているトーマは少し顔を上げると眩しそうな目でタケルを見た。

「うん。母ちゃんがいいって。……それにしても大変だよな、看護師さんって」

トーマの母親である咲子はシングルマザーで、大きな病院で働いている看護師だ。夜勤が入るとトーマはよくタケルのうちに泊まる。トーマが生まれるまでは救命救急の仕事もしていたそうで、相当なやり手のようだ。今でこそ病棟勤務だが、責任の重い立場にあるようでもとても忙しい。それでもトーマにとっては尊敬すべき自慢の母であり、タケルにとっては「いつもクールでカッコいい、超イケてるおばちゃん」だ。

タケルとトーマは保育園の乳児クラスからの付き合いで、ほとんど兄弟のようなものだった。家も近いのでしょっちゅう行き来している。母親同士も仲が良い。タケルの母親、佳奈のさっぱりしたあけっぴろげな性格に、咲子は癒されるとよく言っているそうだ。お

互いに色々な相談をしたりして、今では家族ぐるみで付き合っている。

タケルの家は自営業で必ず誰かが家にいる。人の出入りが多いので、トーマを預かるくらいタケル一家にとってはなんでもない。それに佳奈はタケルと全く違う性格のトーマのことがお気に入りなのだ。いつも犬みたいに駆けずりまわっているタケルと、物静かで見立たない、とんでもなく真面目な秀才のトーマ。見ていると飽きないらしい。

「そういえば、今日の夜の高乃城 たかのしろ 祭、行ってもいいってさ」

「え、本当？」

トーマはぱつと目を輝かせた。

高乃城祭というのは高乃城市の中心にある大きな公園、高乃城址 たかのしろあと 公園で毎年開かれている祭りだ。この辺りでは唯一の夏祭りだ。この祭があつてようやく夏が来たという実感が湧く。

「トーマと一緒にだったら安心だからって」

鉄砲玉のようなタケル一人では何をするやらわからないが、トーマと一緒にいたらちゃんとブレーキをかけてくれると言ったところだ。

「うーん、夏休みっていいよな」

タケルはもう一度嬉しそうに伸びをした。

> 続く <

ただいま！ と大声で家の扉を開けると、妹のアユミがペタペタと足音を立てながら廊下を全速力で走って来た。

「いにい〜〜！」

「おお、アユ〜」

タケルは手にしていた上靴袋を放り投げて、駆け寄ってきたアユミをぎゅっつとハグした。

「なんだ、帰ってたのかあ」

ぶにぶにのほっぺたをつんつんすると、アユミはにい〜つと笑った。

妹のアユミはまだ二歳で、保育園に通っている。ふわふわの髪の毛を頭のでっぺんでチヨロリンツとくくっついて、走る度にそのチヨロリンがぶかぶか揺れる。やたら人懐っこい性格で、タケルを見上げる瞳からはいつも“好き好きビーム”が出ているような気がしてしょうがない。まるでハムスターかミニウサギみたいだとタケルは思っている。歳が離れているからか、タケルはこの妹が可愛くて仕方ないのだ。時々、宿題のプリントを派手に破かれたりするが、どうせ適当にしかやらないプリントである。どうってことはない。もっとも、その後、二人して母親に怒られるのだが……。

タケルはアユミをどっこいしょと抱き上げる。背中にランドセル、前に妹、なんともかさの高いことだ。

廊下の奥の扉からひよいっと父親の哲司が顔を出した。

「あれ、父ちゃん。いたの？」

「ああ。近所の仕事だから昼ご飯は家で食べようと思って。もう少ししたらまた行く」

哲司は腕の良い大工だ。口数は少なく余計な事はほとんどしゃべらないが、荒っぽい口をきくこともない。後輩の話にもよく耳を傾け、相談にも乗ったりしているようだった。そんな哲司を慕って、

家にはしょっちゅう大工仲間が出入りしている。絶大な信頼を得ているようだ。

日に焼けてがっちりした身体の、見た目はかなりいかつい男だが、意外なくらいに優しい目をしている。アユミには勿論、タケルに対しても穏やかで滅多に怒る事はない。しかし、何か悪い事をした時はどうにも逆らえない強い瞳で見据えられる。そんな時はまるで心の奥底まで見通されるような気がして、哲司の前では絶対に嘘はつけないとタケルはいつも思う。

タケルは妹を哲司に渡した。

「なんでアユミ帰ってんの？」

「今日は昼から母ちゃんの家にいるからって」

「あ、そうだった」

言われてみれば、高乃城祭に出店する町内会の準備で、近所の人何人か家に来ると言っていたような気がする。

タケルはでかい声でわめきながら台所に入った。

「あゝ、腹減った！」

台所では母親の佳奈がちょうどそうめんをゆがいていた。ショーカットで、スラリとした後ろ姿だけを見ていると二人の子持ちにはとても見えない。学生の頃は陸上をしていて、県大会で好成績を収めたそうだ。タケルの運動神経の良さは自分から受け継いだのだと、時々自慢している。

佳奈はタケルの声を聞いてちらりと振りかえった。

「おかえり」

「あゝ、腹減った！」

「通知表は？」

「あゝ、腹減った！」

「返してもらったんでしょ」

「あゝ、腹減った！」

佳奈が片方の眉をつり上げて「こいつは……」という表情を浮かべる。まあ、予想通りなんだろうけど……という“つぶやき”がタ

ケルの頭の中に届く。

「あゝ、腹減った！ メシ、メシ、母ちゃん、メシ！」

タケルはわざとらしいくらい大げさに叫んだ。

佳奈はにやりと笑うと、タケルに人差し指を突きつけた。

「食事の前に見たらきつと食欲失くすような内容なんだろう。後でしっかり見せてもらうよ。覚悟しておきな」

タケルはとほほ……と頭を抱えた。

佳奈は一人で工務店と家の事をやりくりしている。男勝りでしっかり者だ。タケルの友人達の間では「細くてきれいなお母さん」などと言われているが、なんのなんの、肝っ玉母ちゃんという言葉は佳奈のためにあるのだと、哲司が時々口にするくらい、肝が据わっていて頼りがいがある。中身は男なんじゃないかと思うくらいだ。竹を割ったような性格で、裏も表もなく、とにかくさばさばしている。体育会系で鍛えられてきたからか、恐ろしく負けず嫌いだ。責任感と正義感の強さは相当で、間違っていると思ったら相手がヤクザでも注意しかねない。口うるさくてかなわない時もあるが、佳奈が一家の太陽であり、彼女がいなければ家も仕事も回らないというのは子供のタケルでもわかる。

「トーマはいつ来るの？」

佳奈はテーブルの上にそうめんを大盛りにした大皿を置きながらタケルを見た。

「六時くらいだつて。家の片付けしてから来るつて」

「えらいねえ。トーマは。お前も少しは自分の部屋、片付けな！」

佳奈に頭をはたかれそうになり、タケルは慌ててよける。

「明けても暮れてもサッカーサッカーって。ヘディングのしすぎでバカになったんだよ、きつと。バカにつける薬はないって言うけど、トーマの爪の垢でも煎じて飲んだら、少しはましになるかしら」

「腹壊します。……いてえ！」

べえつと舌を出した途端に佳奈に頭をはたかれた。

> 続
<
<

六時きつちりにトーマは川上家の前に到着した。インターホンを鳴らそうと指を伸ばした途端、玄関の扉が勢いよく開いてタケルが飛び出してきた。

「相変わらず早いね」

トーマが小さく口笛を吹き、タケルは胸をそらした。

「トーマがその角の辺りに来たくらいでわかる」

「だんだん範囲が広がってるみたいだね」

タケルには特殊な能力がある。どうやら生まれつきの力のようだった。

人の考えている事が“聞こえてくる”のだ。テレパシストというらしい。タケルにとっては当たり前のことだったが、大きくなるにつれてその力が他の人にはない、特殊なものである事がわかってきた。

トーマはそれこそ赤ちゃん時代から一緒にいるのでタケルのその力のことは知っていた。テレパシストという言葉を知ってタケルに教えてくれたのもトーマだ。

二人は「どれくらいの距離から“声”が聞こえるか」というのをよく試す。トーマがタケルに心の中で呼びかけながら歩いてくるのだ。そしてどの辺りで聞こえてきたかというのを調べる。

ゲーム感覚でやっているが、だんだんタケルの能力は強くなってきたりするようだ。聞こえ方も変わって来ていて、最初は波のように聞こえたり聞こえなかったりしていたが、最近ではかなりはっきりとした言葉で聞こえることが多い。

「ちよつとつつとつしいかも……」

タケルの表情が少し曇る。

「最近、授業中に気が散ってしょうがない」

外で身体を動かしている時にはほとんど気にならないが、じつと

しているとどうしても聞こえてくるのだ。同じ教室の中にいる友人達の様々な雑念がまるでテレビかラジオの音のように、さわさわと頭の中に響いてくる。

折しも思春期にさしかかってくる年頃だ。時には聞きたくないような内容の時もある。小さい時と違って、少しずつ皆の心の中も複雑になっていくようだった。あんまり真剣に耳を傾けていると、だんだん人間不信になるような気がするの、なるべく聞かないようにしようと思うのだが、なかなかうまくいかない。耳から聞こえてくる音なら耳栓をすればいいが、こういう声はどうすれば聞こえなくなるのだろうか。その術をまだタケルは知らない。

なんでこんな力が自分にあるのだろうかと時々思う。授業に集中できないのは勉強嫌いという理由だけではないのだ。今まで役に立った事と言えば、アユミが生まれたての赤ん坊の頃、彼女が何を欲しがっているかがなんとなく伝わってきて、それを佳奈に通訳してあげるくらいだった。

今のところ、この能力をちゃんと理解してくれているのはトーマだけだった。両親にすらまだ言ったことはない。打ち明けてみようかとも思うのだが、ふんぎりがつかないのだ。素直に受け止めてくれるか、それとも「同じつくならもうちょっとマシな嘘を言え」と怒られるか、はたまた「ヘディングのしすぎでついにおかしくなったか?」と病院に連れて行かれるか……。どっちにしても、試すにはかなり勇気がある。

「……きつと何かいい方法があるよ」

トーマはタケルの肩をぽんぽんと叩いた。僕が協力するから……そんな声がタケルの中に伝わる。トーマのあたたかい“声”が聞こえると何故かほっとする。

と、一転してトーマの顔にいたずらっ子のような笑みが浮かんだ。「ところで、どうだった? 今日は何発?」

そして楽しそうにタケルを覗き込む。

「五発。五年の三学期よりは一発少なかったな」

タケルは佳奈にはたかれた頭を大きさに撫でてみせる。痛いとい
う程のものでもないのだが、ぼんぼん頭をはたくから余計にバカに
なるのだと、タケルはいつも思う。よっぼどはたきやすい頭をして
いるらしい。

「トーマの爪の垢でも煎じて飲めってさ！」

「お腹壊すって」

「俺も同じ事言ったら、はたかれた」

二人は顔を見合わせて笑った。

> 続く <

夕方になって二人は自転車に乗って家を出発した。高乃城址公園までは自転車で十五分くらいだ。少し遠いが、タケルはサッカーの練習で毎週行っているので特に問題もない。

高乃城址公園の自転車置き場は既に八割くらいが埋まっている。そこに自転車を停めると二人は公園の中に入った。

公園の中央には高乃城神社があって、そこが昔の天守閣があった場所らしい。城を守るために作られていた堀の名残の池があり、その周辺は緑の豊かなビオトープになっていた。他にもサッカーや野球が出来るような広いグラウンドがあったり、遊具のある広場もある。日本庭園のようなスペースもあり、訪れる人は子供からお年寄りまで様々だ。ちなみにこの辺りの小学生は一年生の遠足でまずここに来るといのがお決まりだ。

遊歩道から神社の参道に入ると、道に沿ってずらりと露店が並んでいる。まだ辺りには日が残っているが、露店ごとに眩しいライトが灯されていて、白い光を参道に落としていた。自家発電のモーターの音が景気よく響いている。この音を聞くと、タケルは妙にそわそわしてしまう。

タケルは思いつきり鼻から息を吸い込む。綿菓子のような甘い匂いがするかと思えば醤油の焦げる芳ばしい匂いがする。匂いのおもちや箱のようだ。

「いい匂い……」

トーマもくんくんと鼻を鳴らした。いか焼きのソースの匂いがいきなりお腹を刺激する。軽く夕食は取っていたがこういうのはだいたい別腹だ。

「じゃ、さっそく行きますか！」

タケルがトーマの手をぐいっと引っ張って走り出した。

神社にたどり着くにはまっすぐ歩けば五分程度だが、あっちで食

べ、こつちで立ち止まり、と寄り道ばかりしていると、鳥居の下にたどり着くのに二十分ほどかかっていた。

「そんなにいっぱい持ってたらお参りできないよ」

トーマがくすくす笑う。タケルの右手には焼きトウモロコシ、左手にはリンゴ飴とベビーカステラの袋が握られている。タケルはまずどれを片付けるべきか、真剣に悩んでいる。

「とりあえず、トウモロコシ……だよな？」

タケルはきよきよと周りを見渡した。神社脇の木立の中にベンチが置いてあるのが見える。二人はそこへと移動した。

古びたベンチに腰をかけ、タケルはさっそくトウモロコシにかぶりついた。もりもりっという歯ごたえと醤油の味にタケルはうなる。「うっ、うまー！」

トーマは笑いながら自分の右手の袋を開け、中からタイ焼きを取りだす。

「昔はおもちやとか欲しいって思ってたけど、最近は食べることはっかかりだね」

「なんでこう、すぐに腹すくんだらうな？」

ピカピカ光るおもちやが欲しくて駄々こねて、佳奈によく怒られていた。父親がこっそり買ってくれるのだが、そういうおもちやは大抵すぐに壊れてしまう。次の日にはゴミ箱に突っ込まれることもしばしばだった。今はとにかく食べ物や腹に突っ込む方がなによりも優先だ。

タケルはあつという間にトウモロコシを平らげて、醤油まみれの指をぺろっとなめてた。

「手、洗ってこよ」

「トイレこの辺にあつたっけ？」

「神社のさ、手洗うヤツあるじゃん」

「お清め用だよ、あれ」

トーマが苦笑いする。神社のお清めの水で醤油のついた手を洗って罰が当たったりして。

「醤油つて食い物だぜ。罰なんてあたんないって」
タケルは口をとがらせた。

二人は揃って立ちあがると神社の方へと駆け出した。
神社の中は橙色の柔らかな灯りを灯した提灯がたくさんつるされていた。遊歩道に立っている水銀灯の白い光と違って、随分と落ち着いた光だ。お参りをする人の数は結構多く、昼間の熱気の名残と人いきれで蒸し暑い。

境内の一角ではにぎやかな神楽 かぐら が流れていて、その前でハッピ姿の青年が飛び跳ねながら踊っている。地元の伝統芸能の踊りだそうだ。その周りには人だかりが出来ていて、携帯やビデオを撮る人もいた。

社務所前ではお守りやおみくじを求める人が並んでいる。まだ早い時間だがそこその人出だ。夜が更ける頃にはもつと混雑してくるだろう。

二人は人の間を縫うようにしながら参道の脇にある手水屋へと向かった。

手水屋の石造りの水槽はところどころ苔が生えていて、いかにも古そうだ。水槽の端には色のあせた龍の彫り物があって、その口からちよろちよろと水が出ている。

タケルはベビーカーとリング飴の袋をトーマに持ってもらって、うつぶせにおいてある柄杓を取ると、龍の口から流れる水を受け、手を洗った。

後ろに一步下がった時、むぎゅつと誰かの足をふんづけた。きやつという声がして、タケルは思わずバランスを崩してよろめく。ふんづけた足の主と強く身体がぶつかりそのまま二人して尻もちをついた。

「ごめんなさい！」
タケルは慌てて相手を見た。

> 続く <

長い黒髪の、同じ年くらいの女の子だった。

傍にいたトーマが慌てて駆け寄って、女の子を起こそうと手を差し出している。

尻もちをついた拍子に、肩から下げていたポシェットの中身が転がり出たらしく、携帯電話と財布が地面に転がっていた。丁度手を拭こうとハンカチを出したところにタケルとぶつかったらしい。

タケルは慌てて携帯電話と財布を拾い、ついた泥を自分のズボンでごしごしと拭った。そして慌てて立ちあがった。

「ごめん！ 大丈夫だった？」

女の子は顔をしかめて汚れたスカートを手で払っている。そしてタケルから携帯電話と財布を受け取った。

「……ありがとう」

「けが、してない？」

「うん」

うつむき加減に頷くと、そそくさと人混みの中へと紛れて行く。人前でぶざまに尻もちをついてしまったのがよほど恥ずかしかったのだろう。

「悪いことしちゃった……」

タケルは頭をかきながら隣のトーマを見た。

トーマはぼーっと女の子が消えて行った方を見ている。

「トーマ？」

タケルの中に、トーマの心のざわめきが伝わってくる。今までに感じたことのない、妙に浮ついた、ほのかにピンク色のざわめき…

…。

「トーマ？」

もう一度声をかけるとトーマははっと我に返った。

「タ、タケルは大丈夫？」

慌ててタケルの背中や膝を見る。トーマのやつ、何を動揺してるんだ？ タケルはきよとんとしながらトーマを眺めた。

決まりが悪くなったのかトーマはきよろきよろと視線を泳がせた。「ん？」

急にしゃがみこみ、何かを拾い上げた。立ちあがったトーマの手の中にはビー玉ほどの水晶玉と龍の彫り物のついた根付けが乗っていた。

「何？」

タケルが覗き込む。

「ストラップ？ えらく渋いな」

トーマは柄杓の水をかけて泥を落とした。水晶玉には小さな幾何学模様が彫りこまれている。家紋のようだ。

「根付けだよ。紐が違うだろ？」

確かに細い黒い糸のような紐ではなく、古びた細い組紐だ。千切れたようである。

「財布とかにつける、おまじないみたいなものだよ。……これって、もしかして、さっきの？」

トーマがタケルを見た。

「確かに財布、落としたよな。でもさ、子供が持つのに渋くない？」

「……まあ、確かに」

トーマは手の平に根付けを乗せてじっと見つめている。

「……でも、なんとなく、さっきの子の持ち物のような気がするんだけどな」

そう呟きながら、トーマは自分のポケットに根付けをねじ込んだ。二人はそのままなんとなく歩き出し、神社の方へと向かった。

人波に押されるように境内に入り、本殿の前にたどり着く。財布から賽銭を出そうとして、ほとんど露店で消えてしまったことを思い出し、タケルはぺろつと舌を出した。

「タダでも願ひ事、聞いてくれるかな」

「さあ」

トーマは笑いながら十円玉をタケルに渡してくれた。

申し訳程度に手を合わせる、参道から少し離れたところでベビーカーを口に放り込む。

「これ、アユミちゃんにお土産じゃなかったの？」

トーマが覗きこむ。

「こんなの食わせて、うっかり喉に詰めたらどうするんだよ！って母ちゃんがうるさいんだ。それにさ、まだ露店の食べ物食べさせないで！ってさ。俺には何食っても大丈夫！みたいな事いうくせに、アユミには妙に細かいこと言うんだよ。ああいうのを猫かわいがりって言うんだろ？」

タケルは不服そうに唇を尖らせた。

「タケルだってアユミちゃんの事、充分猫可愛がりしてると思うけど。ちよつとすりむいただけでも大騒ぎしてるじゃん。自分はしょっちゅうズルむけで、だから流血してるのに」

「しょうがねーよ。かわいーんだから。ほれ、トーマ、食べ」

トーマの口に無理やり一つ押し込み、自分は続けざまに二つ三つとほおぼる。と、

「う……喉に……詰まった」

急に目を白黒させる。トーマが慌てて背中をぼんぼんと叩いてくれた。

「タケルが詰めてどうするんだよ。欲張りすぎなんだってば」

タケルはうぐうぐ（水、水）と言いながらさっきの手水屋の方へと向かって走り出した。

苦笑いしながら仕方なくついてきたトーマがあつと声を上げた。

手水屋のところにさっきの女の子の姿があった。下を見ながらきよるきよると何かを探しているようだ。

「やっぱりそうだったんだ！」

トーマがタケルを追い越して走り出す。いつもは大人しいトーマが珍しいこともあるものだ。タケルは首をかしげて後を追った。

泣きそうな顔で足元を覗き込んでいる女の子にトーマは声をかけ

た。

「あの！」

はっと顔を上げた女の子と視線が合った途端に、トーマは急におどおどし始める。

追いついたタケルは柄杓で水を飲みながら、トーマと女の子を交互に見比べた。

それほど明るくない中でもはつきりとわかるくらいトーマは耳まで真っ赤になりながら、上を見たり下を見たり、女の子を見たりタケルを見たりしながら、あの、その、と言葉を探している。じゅわじゅわと頭のとっぺんから湯気でもたっているのではないかとタケルは心配になってきた。

それとは対照的に、女の子の方は不安げな表情でトーマとタケルを見ている。と、タケルの心の中に奇妙な不安感が津波のような勢いで伝わってきた。あまり普段感じたことのない感情の波だ。強い警戒心と怯え。まるでライオンの視線を恐れる草食動物のそれのようだった。よほど人見知りの強い子なのだろうか。

「あのさ、もしかして、さっき、ここで落し物した？」

トーマがあまりおどおどして話が進みそうにないので、仕方なく、タケルが口を挟む。

「え……うん」

女の子がためらいながら頷く。

「それって、ストラップみたいなヤツ？」

タケルはトーマを肘でつついた。はっと我に返ったトーマは、慌ててポケットからさっきの根付けを取り出した。

「これ」

「あ」

女の子の顔がぱつと明るくなる。

「良かった。あった」

トーマがおずおずと手を伸ばした。女の子の手の平にそっとそれを置く。

「大切なものだったの。良かった、あつて」

「俺がぶつかつたから……。ごめんね」

タケルはそう言つて改めて女の子を見た。トーマがドキドキする訳がようやくわかつた。

提灯の明かりに浮かびあがる顔立ちは、びつくりするほど色白で整つていた。可愛いというよりは綺麗と言つた方がいい。それも日本的な、透き通つたような綺麗さ。この子なら、さっきの古風な根付けを持っていても不自然ではないと思わせるような。きつと、着物が似会つに違いない。深い湖を思わせるような不思議な瞳をしていた。こんなに綺麗な子は見た事がない。

が、色気より食い気の方が優先しているタケルはあっさりと視線をトーマに移した。

「トーマ、そろそろ行こうぜ」

固まっているトーマの肘を引つ張る。

「あの！」

女の子が思いきつたように口を開く。

「北口の方に行きたいんだけど……道がわからなくなつて」

タケルとトーマは顔を見合わせた。確かにだだっ広いが、それほどわかりにくい公園ではない。地元の間人なら滅多なことでは迷子にはならない。

「ここ、初めて？」

「……うん」

女の子は小さく頷いた。

「い、いいよ！」

トーマが素つ頓狂 すつとんきょう な大声を出す。

「僕たちが、お、送っていくから」

「え？」

「どうせ僕達ももうじき帰るし！ ね、タケル！」

え？ 今来たところじゃん。まだトウモロコシとベビーカステラしか食つてないし。タコ焼きとミルクせんべいも外せないでしょ。

あ、そついや俺の財布は空だった。いやいや、トーマはまだいくらか残ってるはずでしょ。タケルはそう反論しようとしたが、トーマは既に先頭に立って歩きだしていた。

トーマのヤツ、何舞い上がってるんだ??

タケルは心の中でぶつぶつ呟きながら二人の後を歩き出した。

女の子は不安そうに時々人混みの中へと視線を走らせる。誰かを探しているようにも見えた。そう言えば最初に声をかけた時にも妙に怯えた様子だった。

なんだろう、何をそんなに怖がっているんだろう。迷子になったという不安感だけではなさそうだ。

「ここ広いから、初めてきたら迷子になるかもね」

タケルは二人に並ぶと声をかけた。あまりにも不安そうなので可哀そうになってきたのだ。

「今日は人も多いしね。でもそんなに複雑な場所でもないから、昼間だったら大丈夫だよ」

「よく来るの?」

「俺はサッカーの練習で毎週来る。トーマはビオトープで虫見たりするのによつちゆう。な、トーマ」

タケルはトーマを見た。トーマは赤い顔をしたまま視線を合わせずうんうんと頷いた。

「ビオトープがあるんだ」

女の子の声が少し明るくなる。

「虫好きなの?」

トーマがやつと女の子を見た。クラスの女子などは虫と言っただけじゃあきゃあ大騒ぎする。

「好き……という程でもないけど、怖くはないかな。慣れてるから」

「へえ、珍しいね。ここのビオトープ、いいよ。糸トンボもいるんだ」

「へえ、こんな街なの?」

トーマの目が急に輝きます。ほら、来たぞ。虫の話になると急に

スイッチが入るんだ、こいつは。タケルはおかしくなつてにやにやした。

初めて出会った女の子相手に糸トンボについて熱く語りだす。

トーマは優しいし、大人しいし、とんでもなく頭が良いから、女子からも好かれそうなものだが、案外人気がない。あんまりにも興味が偏っているのだ。テレビで見るのはニュースとかドキュメントとか、動物や昆虫物ばかりで、アイドルやらスポーツやらには全く興味が無いようだった。だからクラスの女子とはほとんど共通の話題がない。うっかりクラスの女子に虫の話なんかしようものなら、十秒で逃げられる。もつともトーマにとって、そんな事はどうでもいいようで、おかしくなるくらいマイペースに自分の興味を追求していく。良く言えば学者、悪く言えばオタクといったところか。

が、今日は少し様子が違うようだ。意外な事に女の子はうんうんと熱心にトーマの昆虫談義を聞いている。それもかなり興味深いような手ごたえだ。さらに驚いた事には、彼女の心の中の不安感やだんだん小さくなってきているようだった。世の中には不思議なことがあるもんだ。と、タケルは感心した。

露店の続く道から枝分かれしている遊歩道の方へと向かう。北口に向かう道は帰る人よりも来る人の方が多い。まだまだ宵の口だ。これから祭を楽しもうという人達だろう。

「この近くに住んでるの？」

女の子がトーマに尋ねる。

「自転車で十五分くらい。君は？」

「……家は遠いんだけど」

一瞬口ごもる。そのわずかな時間にタケルの中に“声”が響いた。

なんて答えたらいいんだろう……。ヒノオとは関係ない人達だとは思っけど……。

それは明らかに焦っているといった様子だった。タケルははつと

して女の子を見た。ヒノオ？ なんの事だろうか。

「親戚の家に遊びに来てて……。夏休みだから……」
慎重に答えを選んでいようだった。

トーマは女の子の心のぶれにはまったく気がつかず、楽しそうにしゃべっている。女の子の心もまた穏やかになり、トーマとおしやべりを楽しんでいるようだ。

なにやら訳がありそうだ。ただの綺麗な女の子……。そんなものではないような気がしてならない。この子は何かが違う。そんな思いがざわざわと心の表面を撫でて行く。それはトーマの心のざわめきとはまた違う戸惑いだった。予感と言った方がいいのかもしれない。
「そうだ！」

トーマの大声にタケルははっと我に返る。

「明日、僕ビオトープに行くつもりしてるんだけど、一緒にどう？」
トーマのセリフに思わず目をむいた。トーマが女子を誘っている？ なんだ、なんだ、この展界は？ トーマが女の子をナンパしている！？

「タケルも行くんだよね？」

トーマは強い口調で言いながらタケルを見た。その目が、「頼むから、うんって言うて！」と懇願している。

「え？ う、うん」

そんな約束はしていなかったはずだよ……。タケルはとまどいながら勢いに負けて頷いてしまった。

「え？ いいの？」

「もちろん。高乃城の案内してあげるよ。ね、タケル！」

「う、うん」

なんだこの積極性は……。タケルはあっけにとられてトーマを見る。

三人は北口にたどり着いた。広い道路の向こう側から誰かが叫ぶ。
「琴音ちゃん！」

女の子ははっとした顔で声の方を見て、ペロツと舌を出した。

「親戚のおばさん。見つかった」

そして二人に向かって丁寧に頭を下げた。

「どうもありがとう。……明日、本当にいい？」

「もちろん。じゃあ、ここで。午後は暑いから、午前中がいいよね。十時とかでもいいける？」

「うん。……ええつと、名前は」

女の子は二人の顔を見比べた。ああ！ と、トーマは声を上げる。

「僕トーマ。こっちがタケル」

そして右手を差し出した。女の子はびっくりしたようにその手を見ていたが、ふっと笑みを浮かべた。

「私、琴音」

トーマの手をふわりと握り、そしてくるりと踵を返した。

「じゃあ、また、明日！」

琴音というその少女は小走りに声の主の方へ向って走り出した。

交差点を渡ったところに若い女性が琴音を待っていた。勝手に家を抜け出した事を叱っている声が微かに聞こえてくる。

「琴音って言うのか……綺麗な名前だな」

トーマがぼそつと呟いた。遠くに見える琴音の後ろ姿と、上気した顔で見送るトーマを、タケルはきよとした顔で交互に見比べた。

> 続く <

誘拐

& l t ; i & g t ; (前書き)

タケルとトーマは夏祭りの夜に琴音という美少女と出会う。ひと夏をこの町で過ごすためにやってきたという。タケルは琴音の心の中の影に気がつくが、トーマはこの美少女に一目ぼれをしてしまったらしい……。

誘拐

< ; 1 >

祭から一週間が過ぎた。

タケルはこのところ毎朝トーマの襲撃で起こされる。

八時前にはトーマが家にやってきて、タケルを叩き起こし、無理やり宿題をやらされ、十時前にはトーマに公園に連れて行かれる。

夏休みの自由研究と称して毎日のようにビオトープに虫の観察に行く。しかし、虫の観察というのは表向きで、なんの事はない、そこで祭で出会った美少女、琴音と会うのだ。

正直タケルはどうでも良かったのだが、トーマの変貌ぶりがおかしくて、ついつい付き合ってしまう。トーマの浮かれっぷりはただ事でなく、毎日うきうきしているのは一目瞭然だった。ようするに一目ぼれというやつだ。

琴音はタケルやトーマと同じ六年生だった。夏休みを高乃城の親戚の家で過ごすという。住まいは東京だということだった。

今時の女子にしては珍しく、トーマが採った虫を興味深そうに覗きこんだり、触ったりする。

「怖くない？」

トーマが遠慮しながら小さなアマガエルを見せた時も、にこにこしながら、

「全然。かわいい」

と、自分の手のひらに乗せてみせた。

「今の学校に来るまではしょっちゅうこんな事してたから。久しぶり」

「今の学校ってことは、引っ越しして東京に？」

トーマが何気なく尋ねると、琴音の顔に一瞬戸惑いの色が浮かんだ。

「……うん。とんでもない田舎から東京に来たから……。すごくびっくりした!」

すぐに明るい口調に戻ったが、タケルはちらりと琴音の横顔を見た。

トーマは気がつかなかったようだが、一瞬、琴音の心が動揺したことがタケルに伝わってきたのだ。

タケルは二人から少し離れたところでリフティングの練習をしながら考えていた。

琴音には何か秘密があるに違いない。それが何かはわからないが、どうやら他人にはあまり知られたくない事である事は確かだった。

この一週間、琴音の様子を見ていたが、時々琴音から不思議な波を感じるのだ。それは自分が予期していないような質問をされた時や、びつくりした時などに伝わってくる。その波は今まで周りの人間、家族やトーマ、クラスメートがびつくりした時などに感じるものとは全く質の違ったものだった。

その違和感は少し危険な匂いがする。動物的な直感とでも言うのだろうか、理由はわからないがタケルの中の本能の部分がそうささやいているような気がしていた。

タケルの不安をよそに、トーマはどんどん琴音に引き寄せられていく。それが手に取るようにわかるだけに、タケルは自分の不安をトーマに言えないのだ。こんな事をいつたらきつとトーマは怒るだろう。自分にとって大切な兄弟のような親友を怒らせるのはこわかった。今のタケルにとっては誰よりも信頼できる友達なのだ。

「タケルくん！」

琴音の声にはっと我に返る。いつの間にかトーマの姿が消えていて、琴音がタケルの傍に立っていた。

「あれ？ トーマは？」

「お手洗いだって」

タケルは地面に転がっていたボールを右足でひょいとすくい上げ、手で受けた。

「すごい」

琴音が目を丸くする。

「ジャグラーみたい」

「いやあ、それほどでも」

さっきまでの琴音に対するほのかな不安はどこへやら、タケルは思わず照れる。おだてにはからつきし弱いのである。

「サッカー上手いのね。もう随分長くやってるの？」

「サッカークラブに入ったのは一年だけど、保育園の頃から父ちゃんとボール蹴りやってたかな」

「じゃあ、将来はサッカー選手だ」

「うん、ま、なればいいけどね」

タケルはボールを地面に落とし、軽く蹴りながら日陰へと移動した。そこに腰をかけると琴音もその隣に腰を下ろす。

「琴音ちゃんはスポーツとか得意な人？」

「……だめ。どんくさいっていつも笑われる。ぼーっとしてるから、周りのスピードについていけないの」

琴音は小さく笑うと肩をすくめた。

「小さい頃から、あんまり同じ年頃の友達がいなかったんだよね。」

小学校に入ってから、なんか上手く話せなかったりで……。だからトーマくとタケルくんがすごくうらやましい……」

「……そうなんだ」

琴音の顔には寂しそうなほほ笑みが浮かんでいる。大人の女ならともかく、十二歳の子供には似つかわしくないほほ笑みだ。その途端に、タケルの脳裏に映像がフラッシュのようにちらつく。

小さな子供達が遊んでいるのを少し離れたところから眺めている琴音。一緒に遊んでいる友達を大人が慌てて連れて行ってしまふ。まるで琴音から逃げるかのように……。

頭の芯がちりちりと痛む。タケルは思わずこめかみを押さえた。

「大丈夫？」

琴音がびっくりしたように覗き込む。

「大丈夫……。太陽に当たりすぎたかな」

タケルはとつさにその頭痛を太陽のせいにした。見てはいけないものを見た、琴音に悪い事をした、そんな気持ちが湧きあがってくる。

「ずっと直射日光に当たってるからよ。頭冷やす？」

立ち上がりかけた琴音を慌てて止める。

「大丈夫大丈夫。これくらいなれてるから」

そお？ と琴音は心配そうに再び腰を下ろした。

「ねえ、試合とかがつてよくあるの？」

琴音はふいに明るい口調で聞いてきた。

「うん。しょっちゅうある。練習試合とか交流試合とか、毎月なんかあるね。公式試合だけでも年に五、六回はあるかな。そっぴや、次の日曜日も試合だ」

隣の市のサッカーチームとの交流試合だ。

「出るの？」

「うん。一応レギュラーだからね」

ちよつと自慢気にタケルは鼻の下を指でこすつた。実際、選抜メンバーの時でもたいていはレギュラーに入っている。今度の試合はチームの六年生が全員出場する予定なので、当然タケルも入っている。

「このサッカーグラウンドでするんだ」

タケルは木立の向こう側を指さした。へえ〜つと言いながら琴音が指の方を眺めた。

「一度見てみたいな。サッカーの試合」

琴音のつぶやきを聞きながら、タケルの視界にトーマが小走りに戻ってくるのが見えた。

「じゃあ、トーマと一緒に見に来る？ でも、言っとくけど、暑いよ」

「うん！」

琴音は嬉しそうに言うと、トーマに向かって手を振った。トーマが少し離れたところから顔を上気させながら手を振り返した。

> 続く <

日曜日は曇っていて、午後からは雨が降るという予報だった。タケルは一人でグラウンドへ来て、ウォーミングアップをしていた。試合は十時からだが、一時間前には来てウォーミングアップするのが習慣だ。

軽く身体を動かしていると、いい感じでエンジンがかかってくる。リフティングを何回かしてから高くボールを上げて、胸に当てて落とす。

軽くドリブルをしながらゴールに向かって蹴りこむ。

ボールは高く上がって綺麗な弧を描き、ゴールネットを揺らした。「まあまあだな……」

タケルは呟くと自分のボールを取りに行く。蒸し暑い天候だが、身体の動きはまずまずといったところだ。

コーチが集合の号令をかける。

そろそろ試合が始まるようだった。タケルは自分のボールを足で軽く蹴りながらチームメートの元へと向かった。

「今日も頼むぞ、タケル！」

チームメートがタケルの尻をポンと叩く。タケルは自信ありげな表情で親指を立てた。

センターラインに沿って選手達が並ぶ。

夏の重い空気を切り裂くように、鋭いホイッスルの音が鳴り響いた。

トーマは北口の花壇の縁に腰をかけ、琴音を待っていた。待ち合わせ時間は十時だったが、既に二十分が過ぎている。

「どうしたんだろう……」

腕時計をちらちら見ながら、落ち着きなく辺りをきよるきよると見回す。途中で事故にでもあったんじゃないか……などと、そんな

不安まで湧きあがってくる。

「あ、来た」

思わず立ち上がる。交差点の向こうで琴音が手を振っている。信号が青になると、駆け足でこちらに向かってきた。

「ごめんなさい、遅くなっちゃった！」

琴音は息を切らしながら両手を合わせて謝った。

「うん、大丈夫だよ。そんなに待ってないし」

デートで待たされた男が口にする常套句だ。トーマにとっては二十分待たされたことよりも琴音が走って来てくれた事の方が嬉しい。「このところ出歩き過ぎって、おじさんに注意されたばかりだったから、家を出るタイミングがなかなかつかめなくて」

親戚の家に滞在中という琴音は、外出する時、どうやらその親戚の目を盗んで家を出てきているようだった。よほど良家のお嬢さんなのだろう。

「大丈夫なの？ 怒られない？」

「うん。怒られることはない。……と思う」

琴音はぺろっといたずらっ子のように舌を出した。

「じゃ、行こうか」

「うん」

二人は公園の遊歩道を歩きだした。

二人の姿が消えるのと入れ違いで一台の黒い車が北口の前に停車した。後部座席から男が二人降り立つ。一人はまだ若い、二十代前半だろうか、鋭い目をした男である。もう一人は五十代くらいの痩せた、陰気な目をした男だった。

「間違いないな」

「はい」

二人は顔を見合わせると小さく頷いた。

> 続く <

トーマと琴音がグラウンドにたどり着くと試合は既に始まっていた。白いゼッケンのチームと、青いゼッケンのチームが激しくボールを奪いあっている。

サッカーグラウンドを取り囲んでいるコンクリートのひな壇の一番上の段に二人は立って、白と青が入り乱れて動き回っているコートを見た。

「どっちがタケルくん？」

「確か今日は青色って言ってたけど……」

トーマはきよろきよろと視線を走らせる。

「あ、あれ、あれ。今ボール蹴って走ってる」

トーマが指を差すと、琴音は声を弾ませた。

「わあ、速い。すごい、タケルくん！」

タケルは鋭い動きで右左に方向を変えながら、たくみにボールを運んでいく。

「後ろにボール蹴った！　すごい。なんで後ろに仲間がいるってわかるんだろ。それもあんな全力疾走で走ってて」

琴音は目を丸くする。トーマは笑いながら腰を下ろした。琴音もそれにならう。

「だいたいわかるって、タケルが言ってた」

タケルは他の人よりも勘が良い。それは彼の特殊な能力の影響もあるのだろう。

ゲームは前半が終わりそうだった。まだ双方とも無得点だが青チームが少しばかり押しているようだ。

琴音はサッカーのルールをよく知らないようなので、トーマは解説を入れながら一生懸命応援した。

二人ともすっかり試合に熱中していたので、背後に人の気配がしている事に全く気がつかなかった。

いつの間にか男が二人立っている。北口から二人をつけて来た男達だった。

「琴音さん」

若い方の男が目の前の琴音に声をかけた。

琴音の動きが一瞬止まる。

「探しましたよ」

男の声はぞつとするとするほど冷たく、ひとかけらのぬくもりも感じられない。

トーマはようやく後ろの二人の存在に気が付き、慌てて振りかえった。二メートルと離れていない所に男が二人立っている。手を伸ばせばすぐにでも届きそうだ。

琴音は振り向かずにつつくりと立ちあがる。

「こ、琴音ちゃん？」

トーマも思わず立ちあがった。そして琴音と二人の男を交互に見る。両者の間に流れる空気はとても親密なものとは言えない。

琴音は振り向くことなく口を開いた。

「……しつこい。私は帰らないと言ったはずよ」

その声は今までに聞いた事がないほど冷たく強い口調だった。トーマはびっくりして琴音の横顔を見る。

うつむき加減で半眼になり宙を見つめている。両手は固く握りしめられ、小さく震えているほどだった。今のままで無邪気にタケルの応援をしていた琴音ではない。まるで別人のようだ。

「あなた達のバカげた計画に興味はない。でも、お兄様の手助けもしない。とにかく、これ以上は関わりたくない。何度も言わせないで下さい」

琴音の身体から怒りが霧のように立ち上っているのがわかる。人間がこれほど静かに怒りを燃え上がらせる事が出来るなんて、今まで考えた事もなかった。

気圧されたトーマは思わず二三歩、下がる。

「待ちなさい」

もう一人の男が穏やかに声をかけた。

「すぐにブチ切れて怒りを撒き散らすのはいい加減に押さえなさい。そろそろ制御する事も覚えたはずだ。そのための東京生活だったのだからね」

男はじりじりと琴音に近づいてくる。

「こんなところでのんきにサッカー観戦している御身分ではないことは、自分が一番よくわかっているだろう。君には担うべき役割がある。それが君の宿命だ」

「聞きたくない！」

琴音が叫んだ。

一瞬何か熱いモノが勢いよく放射状に琴音からはじき出されたように感じた

思わずトーマはよろめく。

その手を男がぐつと掴んだ。

「わ?!」

そしてそのまま自分の方へと引き寄せ、トーマの首に腕を巻きつけた。

「やめなさい！ 君のボーイフレンドが黒こげになってもいいのかわか？ ここは大人しく私の言う事を聞く方が賢いと思わないかな」

トーマは首をぎりぎり締めあげられ、もがいた。細くて貧相な体つきのくせに、男の力は強く腕はなかなかほどけそうにない。

頸動脈が締められて、頭が熱くなってくる。

なにがどうなっているのかわからない。が、とにかく信じられないくらい、危ない状況になっているのだけはわかる。そしてこのままでは取り返しのつかない事になりそうだ。

「く、くるしい……」

トーマは死に物狂いでもがいた。トーマの悲壮な声に初めて琴音が振り向く。

「トーマ……くん」

ふいに琴音の瞳の表情が見慣れたもの変わる。

「根岸さん、やめて！」

「いやいや、この少年は私達の盾だ。どうやらこの子がいれば、君は自制してくれそうだからね」

「卑怯者……」

琴音の瞳に殺気立った光が宿り、きりきりと怒りが再び高まる気配がする。

「やめなさいと言っただろ？」

根岸の腕は再びトーマを締めあげる。トーマは真つ赤な顔でもがいている。

「言っておくが、私は平和主義者でね。人が苦しむのを見たいとは思わないんだよ。でも、君があんまり言う事を聞かないと保証はしない」

「……」

琴音は根岸というその男を睨みつけていたが、やがて静かに目をつぶった。トーマの身の安全には代えられない。そう思ったのだらう。

「さあ、そろそろ行くか」

琴音があきらめたのを見てとった男は若い男の方を見た。若い男は小さく頷くと琴音の横に立ち、その腕をつかんだ。琴音はその腕を払いのけ、きつい視線で男を睨みつける。一瞬男がひるんだが、トーマのうめき声に琴音ははっと我に返ったようだった。

「行きましようか、琴音さん」

男は再び琴音の腕を掴み、ぐいっと引っ張った。

グラウンドで前半終了のホイッスルが鳴り響いた。タケルはボールを追いかけるのを止め、ベンチに向かう。頭から水をかぶったように汗が流れている。目に入りそうになった汗を腕でぬぐった時だった。

頭の中に“声”が響いた。

タケル！ 助けて！ 殺される！

> 続く <

タケル！ 助けて！ 殺される！

その強さにタケルは思わず一瞬頭を抱えた。その“声”は明らかにタケルを呼んでいた。

「トーマ？」

頭を押さえながら慌ててタケルは辺りを見回す。トーマの悲鳴はがんとタケルの頭の中に鳴り響き続けている。助けて！ 殺される！ そのフレーズが強くなったり弱くなったりしながら、繰り返されるのだ。

「トーマ！」

ただ事ではない。何かわからないがトーマの身に危険が迫っていることは確かだ。

「トーマ！」

ベンチの近く？ いや、いない。ゴールの方？ 違う。観客席？ タケルはトーマの悲鳴が発している方向を探した。

「?!」

コンクリートのひな壇の上だ。男が二人、トーマと琴音を引きずるようにして連れて行く。

四人の人影が壇を登り切り、木立の向こうの遊歩道へと消えた。

「トーマ！ 琴音！」

とっさにタケルはそちらの方へ向かって走り出していた。

「おい、こら！ タケル！」

コーチが慌てて引き留めようと声をかける。

「すみません！ ちょっと、トイレに!!」

タケルはそのまま走り続けた。

コートを突っ切り、ひな壇を駆けあがる。

「トーマ！」

タケルは叫びながら、全力疾走で遊歩道へと飛び出した。勢い余って横滑りしながら停まると、前後を見た。

「どつちだ？」

目を閉じてトーマの意識を探す。トーマ、トーマ、何があった？どこだ？

タ・ケ・ル……。。

トーマの“声”がした。今にも消えそうな頼りなげな“声”だ。

「こつちか?!」

タケルは駆けだした。

嫌な予感がする。何かとんでもない不吉な予感がタケルを駆り立てていた。

ざわざわと遊歩道沿いの木々がざわめくき、暑くて重い風が邪魔をするようにタケルにまとわりついてくる。

「トーマ！」

タケルは無我夢中で走った。

遊歩道から北口へと出た。

タケルは膝に両手をつけてせえせえと息をしながら広場の隅々に視線を走らせる。

「いた！」

黒い車が歩道沿いに停車していた。その後部座席にトーマが押し込められるのが見えた。

「トーマ！」

タケルは叫びながら、そちらに向かって走り出す。

トーマに続いて押し込められようとしていた琴音が、タケルの声に気付いて振り向いた。

「タケルくん！」

「トーマ！ 琴音！」

タケルは必死で走る。が、間に合わない。琴音は乱暴に車の中に

引きずり込まれてしまった。ボタン！ と扉の閉まる音が響く。

「待てよ！ おい！ トーマー！」

タケルが車の傍にたどりつくのと、車が発進するのはほぼ同時だった。

車の側面に手を着こうとしたタケルは、勢い余って車道に転げだしそうになる。

「！」

その途端に、何かに強く引っ張られるような感じがして身体が歩道に向かって引き戻された。

そのまま勢いよく歩道の上にひっくり返り、ごろごろと転がる。

「死にたいのか？」

誰かが強い口調で言いながら、駆け寄ってきてタケルの腕を取って無理やり立たせた。

タケルはその相手を見た。

三十代くらいだろうか、濃紺のスーツ姿の大柄な男だった。サングラスをしているが、ギリシャ彫刻のような彫りの深い整った顔立ちであることがわかる。

白いワゴン車が滑り込むように二人の前に停まる。

「竜介！」

助手席の窓が開いて、声が響いた。タケルの腕を掴んでいた男は、

「ああ」と短い返事をする。タケルの腕を離れた。

「じゃあな」

と、車に乗り込むとした時、再び声が飛んだ。

「君も乗りなさい！ 琴音を追いかけろ」

タケルは反射的に白い車の後部ドアに飛びついた。

「こんなガキ連れてってどうする気だ」

スーツ姿の男、竜介は助手席に乗り込むと運転席の男に非難めいた視線を投げかけた。

タケルが後部座席に乗り込むや否や、車は勢いよく発進した。

> 続
<
<

乗り込んでから急にタケルは不安になる。声をかけられてとつさに身体が動いて乗り込んでしまったが、この二人の正体すらわからない。琴音の知り合いであることは確かのようにだが……。

ハンドルを握っているのはやはり三十代くらいの男だった。後ろからでは顔は見えないが、竜介とは違って体つきはそれほど大きくなく、少しなで肩気味のほっそりした感じだ。

その男がちらつとルームミラー越しにタケルを見た。

「琴音と最近ずっと一緒にいた子のうちの一人だよな？」

「……はい」

「そう。なんだか最近、琴音が随分楽しそうだったから。この一週間くらいかな、琴音が子供みたいな顔で笑うようになったのは。彼女にもちゃんとこんな顔が出来るのかって、ほっとしたよ」

タケルは目をぱちぱちさせた。

「琴音は今僕の家に住んでる。預かっているといった方がいいかな」という事は、このハンドルを握っている男が琴音の親戚のおじさんという事か？ タケルは少し安心した。

男はくすつと小さく笑う。

「で、なんでこんなガキと一緒に連れていくんだ。足手まといだ」

竜介は助手席でむすつとしている。

「ガキガキ言うな！ おっさん！」

タケルは身を乗り出して大声で怒鳴る。おっさん呼ばわりされた竜介は目が点になった。

「トーマが助けてって言うってたんだ！ 教えてよ！ どうなってるんだ！」

竜介は耳を押さえて顔をしかめた。

「うるさい！ 耳元でデカい声出すな。それと、俺はおっさんじゃない」

「うるせ〜！ 三十過ぎたらおっさんで充分だ、おっさん」

タケルはムキになって吠える。運転席の男がくすくすと笑いだした。

「竜介の負けだな。小学生から見たら僕らは立派なおっさんだよ」
「竜介が嫌そうな顔でタケルを横目で見た。誰がおっさんだ……と
いう抗議の独り言がタケルの頭に届く。」

運転席の男はまあまあと竜介をなだめた。

「この元気なボクをあのままほったらかしていたら、間違いなく警察を呼んだだろうよ。今、連中が来たら、また話がややこしくなる」

「……まあ、それはそうだが」

竜介は苦々しく呟いた。

「それに、竜介、偶然だろうか、必然だろうか、僕らはすごい拾い物をしたかもしれない」

唐突に運転席の男が言う。

「君、テレパスなんだよね？」

「なにい？」

竜介がびっくりしてがばつと振り返る。タケルは一瞬何を言われたのかよくわからず、きよとんとした。

「君がタケルくんなんだね？」

畳みかけるような男の質問にタケルはおずおずと頷いた。何故俺の名前を知っている？ いや、それよりも何故俺がテレパスだって知っているのか？ 頭の中が混乱してきた。

「さつき、琴音と一緒にさらわれた子がさ、トーマくんって言うの？ 君を呼んでた」

「……」

タケルは目をぱちぱちさせた。確かにさつきトーマは自分と呼ばれていた。俺はその声を頭で聞いたはずだったんだけど……。あれはトーマが本当に叫んでたのか？

「いや、そうじゃないよ。他に彼の声を聞いた人はいない。それは間違いない。明らかにトーマくんは君が自分の声を聞き取ってくれ

るとわかって呼びかけてた。心でね」

「……ええええ？」

タケルは思わずのけぞった。なんでこの男はそんな事を言いだすんだ？ 心で呼びかけていたという事が、何故この男はわかるのだからか。普通の人間ではあり得なかった。そう、テレパスでもない限り、そんな事が出来るはずもない。

「いやあ、実はさ、僕もテレパスなんだよ」

運転席の男は愉快そうに笑いだす。

「琴音の意識をトレースしていたら、トーマくんの悲鳴が聞こえてね。まさかそれに反応する人間がいたとは……。類は友を呼ぶって、本当にあるんだね。正直僕も驚いてる」

なにがなんだかよくわからないが、どうやらこの男もタケルと同じような能力を持っているらしい。まさか琴音の親戚がテレパスだったとは……。

「ああ、僕ね、琴音のおじさんでもなんでもない、赤の他人。中辻一平と言います。琴音の、まあ、言ってみれば身辺警護みたいな事をしてるわけで。で、これが相棒の高野竜介。竜介はサイコキネシス、念動力を操る。君がさつき車道に飛び出しそうになった時、後ろに引つ張られただろ？ あれがそうだ」

「あ、あれ?!」

タケルは歩道に引き戻された時の感触を思い出した。そうだ、言われてみれば誰もいないのに強く後ろにひっぱられたのだった。

「わああああ、もう、何がなんだかわからない!」

タケルは両手で頭をかきむしり、思わず叫んだ。そして大きな溜息をつく。

「うーん、ちょっと刺激が強すぎたかな。頭がパニックってるみたいだね」

一平は苦笑いした。

竜介とは対照的に、どこまでも穏やかで優しい物言いだ。ミラー越しなのでよくわからないが、目がずっと笑っている。

「お前の友達とやらもサイキックか？」

竜介が首だけこちらを向けた。

「トーマはそんなんじゃない。でも、俺がテレパスだってことは知ってるし、よく相談にも乗ってくれて……」

「小学生のくせに生意気な……」

竜介はふんと鼻を鳴らす。よく出来たガキなんてロクなモンじゃねえ……。そんな咳きが聞こえてくる。この男、相当屈折しているようだ。

「あのお嬢さんもラッキーだな。類は友を呼ぶ、か。サイキックと、心の広いノーマルがボーイフレンドとはね」

「そんなんじゃないよ！」

タケルは口をとがらせて抗議した。が、ふと心に疑問が浮かび上がる。

「あの、琴音は？ あの子もテレパスなの？」

一平と竜介が一瞬顔を見合わせる。

「読んでみるよ、俺の頭の中を」

竜介がにやりと笑って、腕を組んだ。

> 続く <

<:5>; (後書き)

まだまだ続くのであります(笑)。

ちくしょう、試してやがる。タケルは一瞬むっとしたが、一つ大きな深呼吸をすると目を閉じた。

意識を集中する。もやもやとした頭の中に囁き声のような言葉が響いてくる。

「……パイロ……キ、ネシ、ス？」

タケルは聞きとつた言葉をそのまま反芻する。なんの事だかさっぱりわからないが、確かにそう聞こえた。

ひゅーっつと竜介が口笛を吹き、一平が満足げに頷く。

「そう、パイロキネシス」

タケルは恐る恐る聞いた。

「パイロキネシス……って、何？」

「発火能力保持者。琴音は火を操る」

「火？」

「そう、琴音は精神力の力で物を発火させることが出来る。ただし、彼女がその能力を発揮するのは怒りが頂点に達した時だ。烈火のごとく、という言葉があるが、まさにその通り。でも、そういう精神状態での現象だからね、コントロールがなかなかできない。それに彼女がパイロキネシスとしての力を発揮する時は、別人格になっているようにね」

「別人格？」

タケルは首をかしげる。

「簡単に言えば二重人格、かな。ジキルとハイドって知ってる？」

「……知らない」

「あ、そ」

一平はかくんつと首を傾け、竜介がぷつと吹き出した。

「そうだな……。君が知っている琴音ってどんな子？」

「え……大人しい、優しい、のんびりした」

タケルは琴音の色々な表情を思い出した。祭の夜の怯えたような、不安げな表情。アマガエルを手のひらに乗せて、愛おしそうに見つめていた表情。トーマの話に瞳を輝かせている表情。なんの事はない普通の女の子だ。いや、普通の女の子よりもずっと素直な子だと思っ。

「そう、だね。でも彼女の中にはもう一人の琴音がいる。それは言ってみれば、炎のような、激しい怒りの塊のような……」

怒り狂う琴音の姿など想像できない。しかし、思い当たることがあった。彼女が動揺した時に感じる妙な違和感だ。普通の人には感じたことのない妙な感覚だった。

「そう、それは多分琴音の中のもう一人の琴音の気配だろうね」

一平は運転しながらタケルの心の中の声に答えていく。

「普段はその子は出てこない。でも、彼女が危険にさらされた時や、激しい怒りを感じた時にふいに表に出てくる……」

心の中に住んでいるもう一人の琴音。タケルにはまったく理解できなかった。自分の中に別の自分がいる。そんな事があるのだろうか。どんな感じなんだろうか。

窓の外の景色は見知らぬ街の風景に変わっていく。やがて高速の入り口が見えた。まだまだ走るのだろう。

琴音とトーマを乗せた車はタケルの場所からは見えないが、どうやら一平も竜介も行き先の見当はついているらしい。

しばらく続いた沈黙を破ったのはやはり一平だった。

「彼女のそんな能力を良からぬことに利用したいと思う大人がいてね……。呪いの炎って話、知ってる？」

「呪いの炎？」

タケルは首をかしげた。

「何、それ。怖い話？ あの子、俺、自慢じゃないけど、……その手の話、苦手なんだよね」

思わず顔をしかめてしまう。トイレの花子さんとか、音楽室のベートーベンが動くだとか、学校の廊下の鏡に吸い込まれるとか、

そついう話は嫌いだ。昼間はいいが、夜になると思いだして怖くなる。夜中にトイレに行く時には絶対に洗面所の鏡は見ないことにしているのだ。

「安心しろ。お前みたいな可愛げのない騒々しいガキのところ幽霊なんぞ出やしない。あちらも相手を選ぶ」

竜介の言葉にタケルはガッルル……と鼻の頭に皺を寄せた。

「怪談じみた話ではあるけどね。最近東京で流れ出した噂、だよ」
一平が話を戻す。

「東京で若者の焼身自殺が増えていらい。でも実は自殺じゃなくて、呪い殺されたんだつていう噂だ」

「呪い殺される？」

タケルは思わずゴクリと喉を鳴らした。呪いなんて言葉は耳にするだけでもヤバい感じがする。

「その噂の出所と、琴音が関係している。……まあ、今はこのくらいにしておこうかな。あんまり詳しく言っても、君の手に余りそうだから」

困惑しているタケルの様子を見て、一平はにっこり笑った。そして小さな溜息をつく。

「僕らのようにほんの少し他人と違う能力を持つ者は、過酷な運命と向かいあわなきゃならない時がある。琴音は今まさにその真っ只中にいる……」

にわかには信じられない話だった。要するに琴音はパイロキネシスという超能力者で、その能力を悪用しようとしている人間に追いかけてまわされている。そしてこの二人が琴音の身辺警護をしていて、ついでにこの二人も超能力者だという。

そんなばかばかしい話は聞いたことがない。まるでマンガかアニメの世界だ。しかしタケルにはそんな話でもどこか納得できるところがあつた。なぜなら、タケル自身がテレパスなのだから……。自分がテレパスであるという事実を否定する事は出来ない。自分があり得て、他人はあり得ないなどという事はないのだ。

不安が押し寄せてくる。それは生まれて初めて感じる不安だった。その気持ちを一平は読んだのだろう。ミラー越しにタケルを見た。「こんな話、急に聞かされたらびっくりして当然だ。悪かったね。大丈夫。トーマくと君の家族へは僕らの上司から連絡してもらおうから。今はとにかく、琴音とトーマくんを追いかけたい」

「うん」

タケルは小さく頷いた。一平から伝わってくる波動に疑わしいものは感じない。この二人は信じて大丈夫。タケルの本能はそう言っている。タケルの不安はこの二人に対するものではないのだ。もつとぼんやりした、形のない不安。だが、それが何なのか、自分でもよくわからなかった。タケルはこつんと頭を窓ガラスに当ててそのままたれた。

「俺達、どこに行くんだろ……」

タケルは小さく呟いた。

> 続く <

龍の伝説 & 1 t ; i & g t ; (前書き)

サッカーの試合を観戦していたトーマと琴音が謎の二人の男に誘拐された！ トーマの心の叫びを聞いたタケルは試合をほったらかして、二人の後を追う。二人は車に連れ込まれ、タケルは追う術を無くす。そんなタケルの前に竜介と一平というイケメン・サイキックが現れた。二人に連れられて、タケルはトーマと琴音の後を追う。

トーマの目が覚めた。鼻の奥が痛いくらいにスースーしている。朝礼で貧血を起こしかけた時のような感覚だった。視界も薄い黄色がかつた霧せむやに覆われているようで、はつきりしない。

何やら振動が伝わってくる。それが何かのエンジンの振動だと思がつくのにないぶ時間がかかった。

一体自分はどこにいるのだろう……。何が起きたんだろう……。ぼんやりと考えながら目をこすってみる。

かすむ視界が徐々に晴れてくるとようやく自分が車の中にいることが理解出来た。車の中？ なんで車の中にいるんだろう……。

ふいに稲妻が走るように先ほどの情景が蘇よみがえってきた。そうだ、自分は見知らぬ二人組の男に襲おそわれて、拉致らっぢされたんだ。

トーマは飛び上がった。

途端に隣に座っていた男に抑えつけられる。

「トーマくん！」

琴音の聲がびっくりするほど近くで響く。はっとそちらを見ると、息がかかりそうな距離に琴音の顔があった。

「わ?!」

「良かった……。ぐったりしてたから、どうなっちゃうのかと思っ
た」

琴音は湖のような瞳に涙をいっぱい溜めてトーマを見ている。今にも堤防は決壊しそうだ。

「余計な事を喋らない」

冷たい声こゝろが二人を制し、琴音は眉間の辺りに怒りを溜めながらも押し黙った。

後部座席に二人は座らされていた。二人の両脇には根岸と若い男が座っている。運転席にはまた別の若い男が座っていて、ハンドルを握っていた。

車は高速道路を走っているようだった。

高い壁の向こう側には濃い緑の木々が見える。随分と山の中を走っている道路のようだ。道路の脇に立っている標識から、トーマと琴音に乗せた車が県境を越えた事がわかった。

「どこに行くんですか」

トーマは恐る恐る隣に座っている根岸に聞いてみたが、根岸はちらりと視線をよこしただけで答えない。

「……火王村。私の生まれたところ」

琴音が小さい声で答えてくれた。

「余計な事を喋るなど言っただけです」

琴音の隣の若い男が再び二人を制する。

琴音は鋭い視線を男に投げつけた。男の顔に一瞬怯えの色が浮かぶ。

「わかつてるな、余計な事をするこの少年がとばかりを受けろ」
根岸が窓の外を見ながら琴音に釘をさす。琴音は膝の上に置いた両手を固く握りしめながら目を閉じた。

トーマは少し首を傾けて、前方の景色を見つめた。

まずは自分が置かれているこの状況をなんとかしつかり理解しなくては……と、トーマは頭をフル回転させる。緊急時であればある程、情報を集めて、冷静に分析しなくてはダメだ。看護師をしている母からいつもそう教わっている。

この男達が捕まえたかったのは間違いなく琴音だ。そして、この男達が琴音を恐れているということは明らかだった。自分は琴音を大人しくさせるための道具としてここにいる。なんだか情けない気分だ。護るところか足手まといになっているような気がする。

しかし何故、大の大人が琴音を恐れるのか。たかが小学六年の女子ではないか。琴音になにがあるというのだろうか。そして自分達はどうなるんだろう。もしかしたら殺されてしまったりするのだろうか……。

トーマは小さく身震いした。じわじわと恐怖が心の中で大きくな

つていく。そんな自分の心に必死で言い聞かせる。焦っちゃだめだ。焦っちゃ。希望の光がない訳ではないんだから。

拉致ういされる時、必死でタケルに呼びかけた事を覚えている。タケルがその声に気付いてくれていたら、もしかしたら警察に連絡してくれているかもしれない。いや、車にひきずり込まれる時、微かにタケルの声を聞いたような気がした。タケルはきつと気付いてくれているはずだ。そして、必ず何か手を打ってくれている。

大丈夫さ。だって、タケルだもん。あいつならきつと助けてくれる。きつと……。それまで僕はなんとかして自分と琴音ちゃんを守りきらなきゃ……。

トーマは手のひらににじむ汗を「ごしごし」とスポンで拭いた。

サービスエリアで休憩することもなく、車はひたすら走り続けた。サービスエリアで琴音に逃げられる事を警戒しているのだろう。とにかく一刻も早く目的地に着きたいようである。

結局県境を二つ越える事になった。ようやく車が高速を降りたのは三時間以上経ってからだった。

山々の間に田畑があり、道沿いに古ぼけてくすんだ家々がぽつぽつと並んでいる。そんな田舎の風景の中を車はさらに山奥に向かって走っていく。

まばらだった家もそのうちほとんどなくなり、つづら折りの急こう配の山道が延々と続く。

運転席の男がエアコンを切り、窓を開けた。木々の濃い匂いが冷たい湿った空気と共に車内に流れ込んでくる。重苦しく息苦しかったトーマは少し生き返った思いがした。

タイヤが砂利を踏む音と、甲高いセミの声が聞こえる。太い杉の幹が並んでいるのでよくわからないが、片側は谷に向かっていているように、かすかに水の音が聞こえた。

いくつか峰を越えたようだった。

急に視界が開けた。雲間から射す太陽の光に、薄暗い山道で慣れ

ていた目が痛いくらいだった。一瞬顔をしかめたトーマは窓の外をみて思わずうわっと小さく声を上げた。

山と山の間には川が流れ、川に沿うように緑の田が広がっている。豊かに波打つ稲は小さな緑色の穂を覗かせている。

幾つかの古い家屋が山の緑に呑み込まれそうになりながら並んでいる。古い立派な瓦屋根に白い漆喰の壁の典型的な日本家屋だ。中には苔>こけくむした茅葺>かやぶきくの屋根も見える。

日本の田舎の手本のような景色だった。こんな風景はテレビのドキュメンタリーでしか見た事がない。この場所だけ時間が流れていない。そんな印象すら受ける。

車はゆっくりと集落の中を進んでいく。古い橋を渡り、再び山に向かう道へと進む。その途中に大きな石の鳥居がそびえていた。

鳥居の手前の空き地でようやく車は停まった。

根岸に促され、トーマと琴音は車を降りた。

トーマは鳥居を見上げた。

「ここは……」

「火王村。ここは火王神社」

琴音が重い口を開く。

「私の……生まれたところ」

「そう、琴音は火王神社の宮司の娘だ」

根岸はそう言うのとトーマの腕を掴んだ。

「さあ、行こうか。これからやらなければならない事は山ほどあるんだから」

そして顎をくいっとしゃくって二人の男達に合図をした。二人は無言でうなずくと、琴音を挟むようにして歩き出した。

「君にはまだまだ付き合ってもらおうよ」

根岸はトーマの腕を引つ張りながらその後を追った。

鳥居をくぐると長い石段が続いている。見上げると思わず悲鳴を上げたくなるような長さだ。

そこを延々と上がっていく。半分くらいのところでトーマは思わずへたり込んだ。が、根岸に無理やりひっぱられ、仕方なく歩き出す。

「町の子は弱いな」

根岸がバカにするようにトーマを笑った。トーマは情けない表情で前を歩く琴音を見上げた。三人とも歩みを止める気配すらない。

「……信じられない……」

トーマはああ言いながら歩き続けた。

> 続く <

やっとの思いで石段を登り切ると、広い境内が広がっていた。疲れ果てて倒れそうになっていたが、目の前の光景にトーマは目を奪われる。

正面には歴史を感じさせる古い大きな木造の社殿があり、その傍らには宝物殿だろうか漆喰^{しっくい}で塗り込められた壁の大きな土蔵がある。反対側には社務所兼住宅と思しき、古い日本家屋が建てられている。いずれも長い歳月を感じさせるたたずまいだ。

社殿の後ろは岩盤がむき出しになっている崖がそびえていた。その上の方には黒い洞窟がぼっかりと口を開け、しめ縄がかけられていた。洞窟と社殿は長い木造の階段でつながっている。社殿の奥から洞窟に上られるようだ。まるでこの洞窟を護るかのように神社が建てられているように見える。

静かで、身の引き締まるような敵かな空氣が張り詰めている。パワースポットなどという言葉をよくテレビで聞くが、まさにここには何かの力があると感じさせた。

「あれは……？」

社殿の中に何か大きなものが祀られているのが見えた。暗くてよくわからない。トーマは汗でずれてきた眼鏡を押し上げて目をこらす。

薄暗い社殿の中にあるのは大きな龍だった。黒く変色した、木彫りの巨大な龍がこちらを見ている。口を開け、ららんと目を光らせた龍。一瞬龍の息遣いが聞こえるような気がした。

「……龍？」

「そう、ここは龍を祀っている」

「え、でも、火王神社って書いてますよね？ 龍って水の神様なんじゃないんですか？」

トーマは根岸を見上げた。根岸はちらつと横目でトーマを見る。

「変わってるな、君は。自分がどういう状況にあるのかわかってるだろうに」

「……はあ、『変わってる』とはよく言われます」

「普通は怯えて泣き叫びそうなもんだがね」

「怖くない訳じゃないです。怖いです。……でも、不思議だなんて思ってる」

根岸の頬に薄く笑みが浮かんだ。

「君は学者肌のようにだね」

「はあ」

「あれは、火を吐く龍だ」

「火を吐く……」

トーマは暗闇の中で目を光らせている龍を見つめた。むくむくと持ち前の好奇心が湧きあがる。が、

「残念だけど歴史の勉強はここまで。来なさい」

根岸がぐいっとトーマをひっぱった。

社務所の裏手にまわると比較的新しい作りの民家の玄関に辿りつく。

中に入ると広い土間があった。土間をそのまま突っ切ると裏庭に出る。苔の生えた大きな庭石や石灯籠に、緑色に濁った小さな池、綺麗に手入れをしたら立派な日本庭園だろう。が、まめに手入れされている様子はなく、雑草があちこちで生い茂り荒んだ印象がある。庭の奥には小さな土蔵がある。トーマと琴音はその土蔵の中に放り込まれた。

「しばらくここで待ってなさい」

根岸は無情にそう言い放つと扉を閉めて、外から鍵をかけた。

暗闇と静寂が二人を包み込む。

物騒な大人がいなくなつたという安堵感からトーマはほつつと大きな溜息をついた。

「なんだか妙な事になっちゃったなあ……」

小さく呟く。こういう時はとにかく自分が置かれている状況をき

ちゃんと把握しなくちゃ……。

土蔵の中はかなり薄暗いが真つ暗という訳ではなかった。上の方にある幾つかの天窓から外の光が入ってくる。

棚がいくつも壁際に並んでいる。そこには黒く変色した木の箱や、油紙で包んだ巻物がずらりと並んでいた。この神社の長い歴史を証明するものなのだろう。きっとものすごく貴重な、価値のある物ばかりに違いない。

床は板張りで、歩き回ると時々ぎしぎしと音がする。

真夏だというのにとても涼しい。閉じ込められた今が夏で良かった。冬だったら凍えてしまいそうだ。

「子供の頃、悪い事したらしょっちゅうここに閉じ込められた」

琴音は入口近くにある黒いスイッチを弾いた。天井からぶら下がっている裸電球にぽつと灯りが灯る。

「すごい……なんか、ものすごく古いつて感じ」

トーマの家には裸電球などと言う代物はない。

「時間が止まつてるみたいだ」

「止まつてるのよ」

琴音は寂しそうに呟くと床の上にしゃがみこみ、棚にもたれた。

トーマもその隣に座る。

二人は黙りこんだまま天窓を見上げた。光の筋がまっすぐ射し込んでくるのが見える。セミの声が土蔵の漆喰に沁みるようだ。

「ごめんね……。ヘンな事に巻き込んだじゃった」

ぼつりと琴音が言う。

「……うん」

トーマは頷く。しばらく考えていたが、恐る恐る口を開いた。

「……なんでこんな事になったのか、話してもらえる……よね？」

琴音は目を閉じると、深い溜息を一つついた。そしてゆっくりと語り始めた。

> 続く <

&1t・3>t・; (前書き)

囚われの身となったトーマと琴音。琴音は自分の生い立ちを語り始める……。

< ; 3 > ;

琴音の父は真山貴臣^{たかおみ}といい、この火王神社で神主を務めていた。母は鈴子という。六つ年上の兄、笙^{しやう}がおり、琴音が三歳までは四大家族だった。

琴音には父親の記憶がない。彼は琴音が三歳の時に不慮の事故で亡くなったと聞いている。父の死については誰も教えてくれないので、琴音は未だにその原因を知らない。父の死後、神社は母の鈴子が護っていた。

神社の後継ぎは兄の笙と決まっていたが、いつの頃からか、とある噂^{うわさ}が氏子^{うぢこ}達の間で囁かれ始めた。

真山家の娘は龍の印を持っている、と……。

龍の印。母はその噂を打ち消そうと必死になっていたが、次第に周囲の琴音を見る目は変わってきた。

「火龍の娘だ」

そう囁かれ、恐れられながら琴音は育った。小学校に上がった後もその噂は琴音にまわりつき、友達もほとんど出来なかった。

三年前、小学校が廃校になったのを機に琴音は東京の寮のある小学校に転校する事になった。

このままでは琴音の存在が火龍教と火王村の秩序を乱す原因になってしまう。そして真山家と火王神社の後継者である兄の存在をも脅かす事になるかもしれない。

そんなことになる前に、琴音を村から出した方がいいと古くからの信者達が母に進言したのだ。事実、琴音を火龍教の中心にしてはどうかという声があちらこちらで聞こえ始めていた。

鈴子は迷った。

まだ琴音は幼い。一人東京に出すなど、母親として首を縦に振る訳はない。

しかし一方で、鈴子は真山家と火龍教を護るという使命も持っていた。生まれた時からずっと火龍教の中で育った鈴子にとって、その使命は絶対的なものだった。

真山家は封じ込められた龍を鎮め続けるための血筋である。龍の印を持つ娘が後継者になるなどともない話だ。そして、正式な後継者である笙の立場を守るためにも琴音は村から出さなければならぬ。悩みに悩んだ末、鈴子はそう決断したのだ。

東京での生活は驚きの連続だった。綺麗でお洒落な校舎や敷地、可愛い制服、何もかも村にはない物ばかり。外国人の生徒や先生が当たり前のようにその空間に溶け込んでいた。まるで外国に放り出されたようなものだった。

最初は戸惑う事ばかりだったが、だんだん琴音もその環境に慣れてきた。周囲は琴音の事を何も知らないのだ。龍の印だの、火龍の娘だのといった余計な雑音に悩まされる事もない。自分の事を白い目で見られる事も、恐れられる事もない。親友などと呼べる存在はいなかったが、普通に話ができるクラスメートがいるというだけでも琴音にとっては新鮮で楽しいことだった。

このままこの学校で大きくなっていくのだろう。そして村とは全く縁のない世界で、一人で生きていくのだろう。子供心に琴音はそう感じていた。それも悪くはないかもしれない。そんな風に漠然とした覚悟を持ちつつあった。

しかし思いがけない事が起こった。今年になって母が亡くなったのである。その葬儀のため久しぶりに帰省した時、兄である笙の自分を見る目の冷たさに、あらためて故郷には自分の居場所はないと実感した。

自分の存在が兄にとって邪魔なものでしかない事はうんと小さな

頃から肌で感じてきた。兄は今、神主となり神社を継ぐための修行に入っている。そんな兄が琴音の帰省を望んでいないのは明らかだった。経済的には援助してやると言ってくれたが、その口ぶりは琴音を完全に突き放したものだ。二度とここには帰れない……琴音はそう思った。

そんな時、一人の男が琴音に近づいてきた。

根岸雄次だ。根岸は火龍教の裏方として長年仕切って来た男である。まだ大学生だった頃、研究のため火王村にやってきた。それから二十年以上の間、火龍教の研究をしながら、神社の事務的な仕事を引き受けてきた。事実上、神社の影の主と言っても良かった。

本音を言えば、琴音はこの男が苦手だった。顔はいつもうすら笑いを浮かべているが、目は少しも笑っていないのだ。何を考えているのかわからなかった。それでも母の鈴子はこの男を心から信頼して、全てを任せているようだった。

その根岸が琴音に囁いた。

「火龍教はもつともつと大きな可能性を秘めている。もつとも、君がその中心となってくれば……の話だが」

琴音は断った。根岸の言葉に何やら邪悪な物を感じたのだ。葬儀が終わると東京にすぐに戻った。が、根岸はあきらめなかった。東京にもしばしばあらわれ、琴音にしつこくまとわりつき、自分の元にこないかと誘い続けた。次第にやり方はエスカレートしていき、しまいには見知らぬ若い男がストーカーのように付きまとうようになってきた。

夏休みが近づくと学校も寮も人気がなくなる。困った琴音は学校と相談し、警察に届けた。

その翌日、琴音の前に二人の男達が現れた。中辻一平という優しい男と、イケメンだが近寄りたがたい雰囲気の高野竜介だ。

「初めまして、真山琴音さん。あなたの身柄を保護するために来ました。警察の者と思ってくださって結構です」

直感でこの二人は自分と同じ種類の人間であるということを感じた。信頼とか信用とか、そういう類ではなく、本能でそう感じたのだ。

そして琴音は一平の自宅のある高乃城でひと夏を過ごす事になった。

> 続く <

琴音の、長い話が終わった。

いつの間にか天窓から入ってくる光はなく、裸電球のオレンジ色の光がぼんやりと辺りを照らしていた。

琴音は膝を抱え、腕の中に顔を埋めていた。トーマはその隣で同じように膝を抱えながら天井から頼りなげにぶら下がっている電球を見上げていた。

なんだかとても切なかった。同じ国に生まれて、同じ歳で、どうしてこんなに背負っている物がちがうのだろうか。琴音になんと言葉をかけたらいいのだろうか。可哀そうとか、気の毒とか、そんな言葉をどれだけ並べたところで、琴音が抱えている重荷や哀しみをトーマはどうにもしてあげられない。

自分はどうなんだろうか。ふとそんな事を思う。

物心つく頃には母親と二人の生活になっていた。大学病院で研究者をしていた父は母と離婚した後、外国へ行った。今はアメリカの大学にいるらしい。年末にクリスマスカードが来たり、時々母にメールが来たりするようだが、実際のところトーマの中に父の記憶はほとんどない。それは琴音と一緒にだ。

トーマの母、咲子は優秀な看護師で、いつも凜としていて冷静で堂々としている。ぶれも揺るぎも感じさせない。「私達が迷ったら、患者さんも迷うのよ」と、後輩に指導しているらしい。それはトーマに対しても同じだった。職業柄か、どんな緊迫した状況でも、落ち着いて状況を観察し、把握する。

今頃どうしているだろうか。病棟を走り回っているのだろうか。もう自分が誘拐された事を知っているのだろうか。

「……ごめんね、トーマくん。お母さん、心配してるね、きっと」トーマの気持ちに答えるように、琴音が顔を埋めたまま謝る。

きっと母は心配しているだろう。母一人子一人だ。立派すぎるく

らい立派な母だが、一人息子を思う気持ちには誰にも負けられない。それはトーマに充分届いていた。死ぬほど心配しているだろう。そんな事を思うと涙が出そうになる。

ふとトーマは琴音を見た。

琴音の前で自分は泣いたらダメだ。絶対にダメなんだ。トーマは自分に強く言い聞かせた。僕には、僕の事を大切に思ってくれる家族がいる。死ぬほど心配してくれる母がいる。兄弟のように育ったタケルという親友がいる。でも、琴音には誰も心配してくれる人はいないのだ。僕が泣いたら、琴音ちゃんは絶対に自分自身を許せなくなるに違いない。

「……大丈夫だよ」

なんの根拠もない言葉だとはわかっている。

「大丈夫だよ、きつと」

しかし、トーマは繰り返した。何か言わずにはいられなかった。

それは琴音に対する言葉でもあり、自分を励ます言葉でもあった。

「知ってる？ 想像出来ることはなんでも現実になる可能性があるんだって。だから、大丈夫って思えば、きつと大丈夫なんだよ」

これは母親の受け売りだ。「病は気からって言うでしょ。重病だと思えば、大したことない病気でも重病になっちゃうし、大丈夫なんだって思えば大変な病気でもよくなる事もあるんだから」と。そう、だから、駄目だと思っただけなら駄目になるし、大丈夫だと思っただけなら大丈夫になる。強くそう信じる事が肝心なんだ。僕が迷ったから、きつと琴音ちゃんも迷う。

トーマはきつぱりと言った。

「大丈夫に決まってるんだから……」

> 続く <

その頃、タケルは村の外れにある民宿「龍野屋」にいた。築百年以上という触れ込みのこの民宿は年寄りの夫婦が細々と営んでいるようで商売繁盛には程遠く、広い宿の中はひんやりとしていて静まり返っていた。タケル達以外に客はいないようだ。

「それでも祭りの時には案外客も来るんだけどねえ」

部屋へ案内してくれるおばあさんはしわくちやの顔をさらにくちやくちやにして愛想笑いを浮かべた。

「冬の終わり頃に祭りがありましてね。火を使う古い祭りで、観光客がたくさん来るんですよ。村の人間より多くくらい。その時は娘夫婦が帰って来て、宿を手伝ってくれるんですわ」

よほど普段話し相手がいないのか、おばあさんは一人でひっきりなしに喋りながら廊下を歩く。その後ろをタケルと竜介が黙ってついて歩いていく。

おばあさんは「竹」と札のかかった部屋の前で足を止めた。

「こちらです。お風呂はもうしばらくしたら沸きますから。じゃ、ごゆっくり」

竜介は黙って会釈する。タケルは小さく「とうっす」と礼を言った。

おばあさんが立ち去ってから二人は顔を見合わせた。サングラスの下の竜介の目が困惑している。なんで俺がこんなガキと二人きりなんだ……という言葉がさっきからタケルの頭にちらちらと響いてくる。

「……ガキガキって言うなよ、おっさん」

タケルは横目で竜介を見る。竜介はよほど子供が苦手らしい。しやくに障るのでガキと言われる間は絶対におっさんで通してやろうと決めた。

「入っていいんだろ？」

タケルは木の戸をがらがらと開けた。

中は十畳くらい和室になっている。部屋の真ん中にはいかにも重たそうなちゃぶ台があり、その上には何枚かのリーフレットや骨董品のポット、湯のみや急須の入った木の箱が置かれてあった。

部屋の奥はささやかながら縁側風になっていて、障子のはめ込みである。小さなテーブルと低いソファが二つ置いてあり、風呂上がりにでもものんびりとくつろぎながら外を眺められるといったところだ。サツカーの合宿でこういう旅館には何度か泊まった事がある。タケルは障子を開けた。障子の向こうはガラスの大きな二枚戸だ。少し歪んだガラス越しに、外の景色がよく見える。

日はすっかり傾き、金色の光が山の陰影を際立たせていた。静かな木々のざわめきと、川のせせらぎが聞こえる。セミの声はいつの間にかカエルの声に変わっていた。

タケルはガラス戸を開けて網戸にするとソファに座った。

よく考えたら荷物を全部グラウンドに置いてきてしまった。携帯も財布も、何も手元がない。車の中で携帯を借りて家に電話しようと思ったが、二人とも貸してくれなかった。それどころか一平に、

「すまないがしばらくは連絡出来ないよ。第一、圏外だ」と、いなされてしまった。

試合はすっぱかす、行方不明にはなる、今頃コーチは真っ青だろう。家には連絡が行ったのだろうか。アユは何をしているだろうか。いつもならもうじき一緒に風呂に入る時間だ。父ちゃん、ちゃんと入れてくれるかな……。そんな事が頭の中に浮かんで消える。

「今頃大騒ぎになってるんだろっなあ……」

タケルが呟くと、竜介はちゃぶ台の横に座り込み、長い脚を持って余し気味にしながら胡坐をかいた。

「後先考えずに付いて来るからだ。知らない人には付いていったら駄目だと学校では教わらなかったのか」

「何言っただよ、車に乗れって言ったのはそっちじゃないか」

タケルは口をとがらせた。

「俺じゃない。一平だ。まったく、ああ言えばこう言う……可愛くないガキだ」

竜介はむっとした表情のままちゃぶ台に肘をつき、頬杖をついた。「一平が今動いてる。大騒ぎになられちゃこっちも困るんだ。まあ、事が全て終わって、お前が家に帰ったら、親父さんに一発殴られるくらいの騒ぎにはなってるだろうがな」

「親父で一発……という事は、母ちゃんには五十発くらいか」
タケルはとほほ……と頭を抱えた。

「俺の方が迷惑だ」

竜介はサングラスを取るとちゃぶ台の上に置く。

「ただでさえガキは苦手だというのに、琴音ならまだしも、こんな生意気なガキ。それもよりにもよって、テレパスのガキときている。始末が悪いにも程がある」

「本人の前でぼろくそに言うな！」

「お前、すぐに『読む』だろうが。口に出すだけマシだと思え」

竜介の冷たい言葉にタケルは鼻の頭に皺をよせて応酬した。

「俺と一平だけなら宿なんていらんないんだ。どうせ張り込みで寝られないんだから。お前がいるから仕方なくここに来た。経費で落ちなかつたら、お前の親に請求書回してやるからそう思え」

「なんだよ、それ」

いい歳をして、大人げないにも程がある。タケルはなにか言いかえしてやるうと思っただが、竜介が自分の携帯を取り出し操作し始めたので仕方なく黙り込んだ。

居心地の悪い沈黙が続く。いたたまれなくなって、タケルが立ち上がるうとした時、入り口の戸が開いて一平が入って来た。ごめんごめんとにこにこしながら片手を上げた。

「課長に連絡が取れた。君とトーマくんのご家族にも連絡がついたようだ。警察と相談して、なんとかかつじつま合わせをするってさ。心配しないで。なんとかなるから」

中腰で固まっているタケルに指でOKとしてみせた。

「琴音が無理やり連れ去られたからね、誘拐という事実が出来た。これでもうやく警察が手を入れられるって課長はご満悦だよ。これでもうやく東京の火龍教本部の捜査が進むってさ」

「渡りに船ってやつか。相変わらず性格の悪い女だな……。課長のせいでダークウォーカーなんて仇名をつけられるんだ。うちの課は」
竜介の口調は皮肉たっぷりだ。

「まあまあ、そう言わないで。あ、僕達の上司は女性でね。いい人なんだよ、根は」

一平は困ったような笑顔でタケルを見た。

「なんのことだか、さっぱりわからないよ！」

タケルはむきゅっと鼻息を荒くしながら身を乗り出した。

「ダークなんとかってなんだよ、一体！ おっさん達、警察官なのか？ だったら早く二人を助けてよ。おかしいじゃん、あれ、どうみても誘拐じゃないかあ！」

「ばんっ！ と両手で座卓を叩く。」

一平はタケルの肩を押さえて、無理やり座らせた。

「落ち着いて落ち着いて。ちゃんと説明するから。」

僕達は警察じゃないんだ。警察にはかなり近い組織なんだけど……公安調査庁って言うてね。色々調べたりはするんだけど、残念ながら逮捕権がない。僕達が調べた事を警察に提供する」

「おいしいところは警察に持っていかれるってこつた。……おい、いいのか？ こんなのにべらべらしゃべって」

「こんなのってなんだよ、こんなのって」

タケルは身を乗り出して竜介を睨んだ。

「まあまあ」

そして湯呑を並べるとお茶を入れ始める。

「ここまで絡んでしまった以上、何も教えないうつていうのもね。それに、この子はテレパスだよ。隠したところで読まれるし、中途半端に知られて変に誤解されても困る」

一平の言葉に竜介は肩をすくめた。

「さつき琴音がパイロキネシスで、琴音の力を悪用したがっている連中がいるって話はしたよね」

「……うん」

「その連中は火龍教という宗教団体で、東京に拠点がある。これがまた、ちよつとあぶない集団だね。さつきもちらつと言ったと思うけど、呪いの炎の噂、その噂を流しているのもその団体だ。去年の秋くらいから、都内で若者の焼身自殺が三件続いたんだ。どれも事件か自殺がよくわからないケースで、表向きは自殺なんだけど、死にたくなるような動機がない。身辺調査をすると関係者に火龍教の信者がいる。友人だったり、元カノだったり。でも彼らには完璧なアリバイがある。完璧すぎるくらい完璧な、ね。とにかく、どこかしら不自然な点が多い。証拠がないから警察も手を出しかねていた。そんなこんなしてるうちに、呪いの炎で焼き殺されたんだなんていう噂が流れ始めて……。だいたい若い子っていうのは、そういう都市伝説が好きだからね。みるみるうちに信者が増えてきた。困ったものだよ」

一平は熱いお茶の入った湯呑をタケルの前に置いた。

「その怪しすぎる宗教団体の代表になっている男が、琴音とトーマくんをさらつたんだ。この男、根岸つて言うんだけど、この村の住人でね。琴音とも古くから付き合があるらしい。根岸の狙いは琴音を教団の女神さまとして担ぎ出すこと。本物の超能力者が絡んでるといので、僕らの出番という訳だ。万が一、超能力で犯罪を起こされちゃ警察もかなわないからね」

「……なんで？」

「だって、証拠が残らないから」

あ、そうなのか……と、タケルは納得した。そんな事、考えた事もなかった。

「俺達がダークウォーカーなんて呼ばれる所以>ゆえんくだ。本物の超能力なんてのは堂々と人様の前で披露出来るようなものじゃない……」

竜介が冷ややかに言い放った。その瞳は氷のように冷たい光を帯びている。一平は眉をひそめて首を振った。

「子供の前で言うことじゃないよ、竜介。」

とにかく、琴音が強力なパイロキネシスである事がわかったから、あえてサイキックである僕が彼女を預かっていた。まさか、一人で家を抜け出したりするなんて思いもよらなかったよ。だって、彼女は本当に内気で、大人しい女の子だから。物わりも良いし、自分の立場はよく理解していたし……」

そんな事を言われても……とタケルは鼻の頭をかく。そんな事情があるなんて、思いもよらなかった。

「別に君達を責めてるんじゃないよ。僕達に油断があったんだ。よく考えれば、彼女はまだ十二歳、小学生だもの」
優しい笑顔でタケルを見る。

「君達と出会えたのが、よほど嬉しかったんだろうな」
「……」

タケルは湯呑を握る。

「あちい」

一瞬手を離れたが、またそおつと握りなおした。

「で、俺、どうしたらいい？」

恐る恐る一平に聞いてみる。一平はゆっくりとお茶を呑む。

「僕はこれから東京へ戻らなきゃならない。本部の調査が残ってる。竜介は予定通り、こちらで情報収集を」

一平ののんびりした言葉に竜介が顔をしかめる。

「こいつはどうするんだ」

一平はまじまじとタケルを見る。タケルもじいっと一平を見返した。ふいに拍子抜けするような笑みを浮かべた。

「君はここで待機しててください。一人でつまらないかもしれないけど、しばらくの間です。そう長くは待たせないつもりだから」
「俺にも何か手伝わせてよ」

タケルはまっすぐに一平を見た。トーマを助けなければならぬ

のだ。こんなところでのんびりしてられない。

横から竜介が口を挟む。

「ガキの遊びじゃないんだ」

「わかってるよ！ でもトーマを助けたいんだ」

吠えるタケルを一平がまあまあとだめた。

「大丈夫。あの二人を傷つけるような事は、しばらくはないと思う。琴音は連中にとっては大事な存在だし、トーマくんにかかっていたら琴音が暴走して取り返しのつかない事になるって連中もわかっているだろうし」

そう言つとタケルの肩をポンと叩いた。

「申し訳ないが、今は君に出来る事はない。危険も伴う。君のすべきことはここで待機すること。一人で出歩かない。いいね？」

穏やかだが有無を言わせぬ強さがある。タケルはしぶしぶ頷いた。

一平と竜介はしばらくして出て行った。

> 続く <

閑散とした民宿にただ一人取り残されたタケルは、することもなく畳の上におおむけに寝転がり天井を眺めるしかなかった。

暇を持て余してごろごろと畳の上を転がっていたが、ふとちゃぶ台の上に置いてあるリーフレットを手にした。

「火王村観光案内……観るトコあるのか？」

手作り感満載のリーフレットを開くと、村の中の地図に観光ポイントが描かれてある。

村営のアスレチックや、道の駅があるらしい。季節によってはアユやアマゴを釣る事も出来るようだ。そう言えば祭りの頃には客が多いとさっきのおばあさんも言っていた。

地図を辿っていた指がふと止まる。そこには「火王神社」と書いてあった。

「火王神社……千年以上の歴史を誇る神社で、村の名前の由来になっている火龍を祀っている。火王村のシンボルのなスポット……これって」

タケルは慌てて起き上がると座りなおした。いつもなら絶対にスルーしてしまうような細かい文字を一生懸命辿る。

『火龍伝説』火王村伝承より

昔むかし、海を渡って一匹の恐ろしい龍がやって来た。

そして村の近くにある山の中腹の窟いわやに住みついた。

龍は口から火を吐き、野を焼き、山を焼き、村を焼き、村人はたいていそう難儀した。

何度か都から誉れ高い武将がやってきたが、龍の炎の前になすすべもなく焼き尽くされた。

困り果てた村人は龍を鎮めるために人身御供を立てることにした。人身御供には村で一番美しい娘が選ばれた。

娘は花嫁衣装を身にまとい、窟へ送り込まれた。
不思議な事に、それ以来、龍はぶつとりと姿を見せなくなった。
村人は窟の前に祠を建て、龍と、龍を鎮めた娘を祀った。
それから数年後、祠の前に赤ん坊が捨てられていた。
不思議な事にこの赤ん坊は火を操る事が出来た。
故に村人たちはこの赤ん坊を「龍の子供」として恐れ敬い、たい
そう大切にした……。

「龍の子供……火を操る……」

タケルの脳裏に琴音の顔が浮かぶ。パイロキネシス、発火能力保
持者。さつき確かに一平はそう言った。

「火王村のシンボル……火王神社……火龍教……」
ぐるぐると言葉が頭の中を駆け巡る。

「……龍の子供？ 琴音は、龍の子供？ まさか、そんな話……あ
り得ないよな？ でも」

タケルは茫然とリーフレットを握りしめた。

翌朝タケルの目が覚めたのはまだ明るくなりきらないうちだった。
目に入って来たのは黒く変色した古い天井。ここ、どこだ？ そう
だ、ここは火王村だ。

タケルは昨日の出来事を頭の中で再生しながら、もそもそと身体
を起こした。部屋の中は自分が寝っ転がっている布団だけで、竜介
が帰ってきた気配もない。

「マジでほったらかしか……」

タケルは頭をかきむしった。冗談じゃない。このまま何もしない
でこんなところでごろごろしているなんて耐えられない。

タケルは寝る前に枕元に脱ぎ散らかしたはずの自分の服を探し、
手早く着替えた。椅子の上に置いていたレガース「ユニフォームだが」（脛当て）を手に
とってしばらく考えていたが、それも身につけた。ユニフォームを
着ると気が引き締まる。これはタケルにとって戦闘服なのだ。

タケルは地図の載ったリーフレットを手に玄関に向かった。

廊下はまだ真つ暗といつても良いくらいの静けさが満ちている。そこを猫のように足音を忍ばせて歩いていく。玄関で自分のシューズを履き、そうつと引き戸を開けた。思ったよりも大きな音に一瞬首をすくめるが、人の気配はないようだった。

外に出ると、胸一杯に空気を吸い込んだ。山の匂いが満ち溢れ、しっとりとした湿り気を帯びた朝の空気が心地よい。山の自然から元気をもらえそうだ。

タケルは朝もやが立ち込める中へと駆け出した。

地図を見ながら川沿いの道を足早に歩く。とにかく火王神社とやらにたどり着きたい。そこが琴音に縁のある場所である事は間違いない。火龍教だとか仲間割れだとか、そんな事はどうでも良かった。トーマの無事を確かめなければ居ても立ってもいられない。

地図上では目と鼻の先のようなだが、かなり大雑把な略図だったようである。三十分経ってもそれらしい目印には辿りつかない。もしかしたら見逃して行き過ぎたのか。

「この地図、めっちゃウソつき」

タケルはリーフレットを指でぱちんと弾いた。

遠くで微かに爆音が響いている。

ふと前を見ると、道路から少し下にある田んぼに続く斜面を草刈り機で草刈りをする人が見えた。草刈り機の作動音が広がる田んぼの上に響いているのだった。

タケルはその人に近づくとおそるおそる声をかけた。

「あのお、火王神社ってどこですか」

麦わら帽子をかぶって草刈り機を操っていた男は顔を上げた。

「はあ？」

作動音がやかましくて、タケルの声が聞こえていなかったようだ。タケルの姿を見て草刈り機を止める。そしてタケルの頭の前から足の先までじろじろと見る。見慣れない子だな……どこの子だ？ 男の“声”がタケルに伝わってくる。

「おはようございます。あのお、火王神社ってどこですか？」

タケルは大声で聞いた。

「火王神社かあ？ あそこに橋があるだろお、あの橋渡つたらすぐに鳥居があるから。その上だあ」

「ありがとうございます！」

タケルは頭を下げると小走りに先を急いだ。麦わら帽子の男は手を止めたままじっとタケルの後姿を見送っていたが、またすぐに草刈り機の音が響き始めた。

橋にはすぐにたどり着いた。古い木造の橋だ。欄干から身を乗り出して下を見ると、透明で冷たそうな水の中に小さな魚がすばやく泳ぎまわっているのが見える。川はところどころ深い翡翠>ひすい<色で白い水の流れが生き物のようにうねり流れて行く。

流れに足をつけてみたい衝動にかられたが、今は押さえて橋を渡った。

橋を渡り切るとアスファルトが途切れて地道になる。そしてその先に大きな石造りの鳥居があった。

「あった……」

タケルは鳥居を見上げると目を閉じた。
大きな深呼吸をする。

頭の中のアンテナをうんと広げてみる。

トーマの気配はまだ感じられない。が、タケルを包みこむように静かなさざ波が打ち寄せられてくる。穏やかで静かなその波はどこか懐かしい。時々こんな空気のある場所がある。そのさざ波の源はなんなのかタケルは知らないが、そういうところでは不思議に心が落ち着く。

タケルは目を開けた。薄い朝もやと深い緑の木々の中にまっすぐ続く参道がある。

「……よし、行くぞ」

タケルは駆けだした。

> 続
<
<

キック・オフ&It;1>

トーマと琴音は土蔵の中で一晩を明かした。長い夜だった。ぽつりぽつりとお互いの事を話していたが、そのうち二人とも眠り込んでしまったようだ。

根岸が土蔵の扉を開けて入って来た時、トーマは床の上に丸くなって、琴音は柵にもたれながら眠っていた。

琴音が先に目を覚まし、根岸を見上げる。

「おはよう。よく寝られたかな？」

「……そんなはずないでしょ」

琴音はきつい視線を投げつける。

「いい加減にここから出して。閉じ込めるなら私だけでいいでしょ？ お願いだから、トーマくんは帰してあげて」

「言っただろ？ 全ては君次第。ところで君のボディガードはよほどの寝ぼすけらしいな」

根岸はそういうと、だんつと足を踏みならした。その音と振動でトーマが目を覚ます。

「……あ、おはようございます」

寝ぼけているトーマは目をこすりながら丁寧に朝の挨拶なんかをしてみました。根岸が苦笑いする。

「マイペースなこと……。出なさい、二人とも。朝食だ」

根岸に促され、二人は土蔵を出た。土蔵の外には昨日の若い男が控えている。琴音への警戒は相変わらずだ。

母屋に入り土間を上がると広い台所だった。そこには中年の女性が三人ほどこいて、忙しそうに働いていた。

「琴音さま」

一人の女が琴音に気付き、声を上げた。

「おかえりなさいませ」

他の二人も手を止めて恭しく頭を下げる。

「……やめてください」

琴音は顔をしかめた。

「朝ごはんのご用意をしておりますから」

最初に頭を下げた女が二人を促した。琴音は台所の奥の食卓を見た。幻のように母と兄の姿が見えたように思った。

「どうしたの？ 大丈夫？」

トーマが琴音を覗きこむ。琴音は悲しそうに首を横に振った。

「なんでもない。座って」

二人は並んで食卓についた。

「うわあ……。旅館みたい。日本の朝ごはんって感じ……」

トーマは目を丸くする。ご飯に味噌汁、焼いた鮭に卵焼き、お浸し、お漬物。毎朝パンかシリアルで簡単にすませてしまうトーマにとっては驚異的なメニューだ。トーマのお腹がにぎやかに騒ぎ出す。まるでタケルみたいだ。でもよくよく考えれば昨夜は夕食を食べていない。お腹がすくのも当たり前だった。

一心不乱に食べるトーマと対照的に琴音はあまり食欲がないようだった。

「これから忙しくなる。しっかり食べておきなさい」

根岸が柱にもたれ腕を組みながら琴音に声をかける。

「何があるの」

琴音は固い表情で根岸を見上げる。根岸はにやりと笑うだけだ。

トーマは黙って食べながらも周囲を観察していた。

台所には女性が三人。台所にはもう一つ大きなテーブルが置いてあって、その上には大きな鍋がいくつも並んでいる。

かなり大きな炊飯器が二つ、両方から白い蒸気が上がっている。四人五人の食事の量ではない。少なくとも二十人分くらいはありそうだ。

時々玄関の扉が開け閉めされる音が聞こえ、何人かの男が大声で話す声なども聞こえてくる。人の出入りが激しい。

「ここで集会かなにか、あるんですか？」

トーマはもぐもぐと口を動かしながら聞いてみた。根岸は小さく肩をすくめた。

「集会……まあ、そんなもんだ。もうすぐ笙くんも帰ってくる。鈴子さんの葬儀以来かな、君がお兄さんと会うのは」

「お兄様が？」

「私が呼んだ。笙くんがここに帰ってくるのも最後だ」

「どういうこと？ お兄様にへんなことしないで」

琴音はぱんつと音を立てて箸を置くと、勢いよく立ちあがった。きんつと耳の奥が痛くなるような衝撃が一瞬台所に広がった気がした。

三人の女達が思わずこちらを見て、凍りついたように動きを止める。その顔には怯えの色が浮かんでいた。

「こんなところでやめたまえ。危ないだろう」

根岸は落ち着いた声で琴音をなだめた。

「それとも、ボーイフレンドの前で君の特技を披露してみるか？」
琴音は無言で根岸を睨みつけた。そしてそのまま勢いよく台所を出て行く。

琴音の足音が廊下を遠ざかっていく。張り詰めた恐怖と緊張が一気に解け、女達はへなへなと座り込んだ。

「根岸さん、やめてくださいよ……。琴音さまをわざと怒らすような事、言わないでください。命がいくつあっても足りやしない」

「結構だね。そのくらいの畏怖の心を抱かせてこそ、値打ちがあるというものだ。もう彼女は逃げないだろう。人質もいることだし」

根岸とトーマの目が合った。

「君は人身御供だ。龍を鎮めるためのね」

「人身御供……ですか、僕が」

トーマはじつと根岸を見た。この男は一体何を考えているのだろうか。自分にタケルのような力がない事がつくづく残念だ。

しばらくして一人の男が勢いよく駆けこんできた。

「笙さんが駅に着いたそうです」

「いよいよだな」

根岸は土間の方へと向かう。途中で思い出したように振り返ってトーマを見た。

「琴音は自分の部屋にいるはずだ。あいにく、そこしか空いてなくてね。君もそこにいればいい。もう土蔵には閉じ込めないよ。だが、言っておくが、この屋敷からはもう逃げられない。監視の目があちらこちらにある事をお忘れなく。それに君が逃げ出したら、琴音の身が危なくなる。琴音だけじゃない。暴走する琴音のせいで死人が出るかもしれない。……寝ざめが悪いだろうな、そんなことになったら」

根岸は意地の悪い笑いを残して台所から消えた。女の人が気の毒そうにトーマを見ている。

「……性格悪いですよね、あのおじさん」

思わずグチると、三人の女達は大きく頷いた。

食事が終わるとトーマは台所を出た。土蔵で見張りをしていた男が待ち構えていたようにトーマを見る。

「この先の、一番奥の部屋だ」

無愛想に指さす。トーマはその指先を見た。

長い廊下がまっすぐに続いている。この廊下の突き当たりに琴音の部屋があるらしい。トーマが歩き始めると、少し離れて男がついてくる。

廊下に沿って障子がずっと並んでいて、その向こうで人がせわしく動き回る気配がしている。障子の向こう側を気にしながら進んでいくと、わずかに隙間があった。そこをそつと覗くと、中は大広間になっている。五、六人の男女が座布団を並べたり、長机を出したりしていた。

「そこじゃない」

鋭い声が背後からトーマを制する。トーマは後ろからついてくる男をちらつと見ると、へへつと愛想笑いをしてみせた。男は無言でトーマをじつと見ている。仕方なくトーマはまた歩き出した。

廊下は途中で直角に曲がっていて、そこから再びまっすぐ伸びている。長い廊下だった。この家の敷地の広さがうかがい知れる。

廊下の一番端の部屋だけは襖ではなく洋風のドアがついていた。扉の上部には見るからに急ぎしらの錠がつけられている。トーマはそのドアの前で立ち止まる。後ろからついてきた男が扉に付けられた鍵を外し、トーマを無言で促した。トーマはそっとノックをした。

「……琴音ちゃん。いる？ 入っていい？」

しばらくの沈黙の後、どうぞと言う小さな声が聞こえた。

トーマはそっとドアを開けた。中を覗く。埃っぽいような、カビ臭いような空気だ。この部屋だけが子供部屋らしくフローリングになっていて、ベッドや学習机が置いてあった。プラスチックの小さな引き出しや埃をかぶった旧式のパソコンが部屋の隅に押し込められるように置かれている。主人不在をいいことに、物置代わりにされていたのだろう。

琴音はベッドに腰かけていた。トーマは一瞬ためらったが、思いきって中に入った。後ろ手に扉を閉めると、すかさず外から錠をかけられる気配がした。

「……大丈夫？」

「うん」

琴音は小さく頷く。トーマは琴音の正面に正坐した。

「なんかたくさん人が来るみたいだね。大広間にたくさん座布団が並んでた」

「うん」

「なにが始まるんだろう」

琴音は小さく首を横に振る。

「ごめんね。私もわからない。でも、お兄様が来るって事は、よっぽどの事だと思う。お兄様は今、神主の修行で大学にいるし、もうお母様もいないから、帰ってくる理由はないもの」

寂しげにうつむく横顔にトーマの胸が痛む。

とんでもなく寂しいに違いない。わかるような気はする。保育園
くらいの頃は母の帰りが遅くなる時などふとたまらなく寂しい気分
になったものだ。だが、自分にはタケルとその家族がいた。母が急
な仕事でどうしても帰れない時は、母から連絡をもらった佳奈が迎
えに来てくれるのだ。それでもどうしようもなく寂しくて、タケル
の部屋で布団をかぶってしくしく泣いた事もある。そんな時は必ず
タケルが構ってくれる。トーマの心をタケルはいつも気にかけてく
れていた。タケルのおかげでどれだけ自分は救われているだろう。
しかし、琴音にはそんな友達もいなかったのだ。こんなに優しく
て、可愛いのに、不思議だった。

「聞いてもいいかな……」

うつむいていた琴音は少し顔を上げてトーマを見た。

「僕、よくわからないんだけど、皆どうして琴音ちゃんの事をあんなに怖がってるの？ 僕が琴音ちゃんの人質っていう意味がよくわからない。……龍の印って？ 前、琴音ちゃんが持ってた根付けの事？」

琴音は小さく首を振る。そしてじっとトーマの目を見た。

「……トーマくんには迷惑かけてるもんね。でも、でも、きつと知ったら私の事、嫌いになる。皆みたいに、私の事、怖がって……」

琴音の瞳に涙がたまっていく。唇が小さく震えている。

トーマはどぎまぎした。慌ててズボンのポケットを探り、ハンカチを出すと琴音に差し出した。

「……あんまり綺麗なハンカチじゃないけど」

「ありがとう」

琴音はハンカチを握りしめると、ぎゅっと目を閉じた。それでもまだぼろぼろと涙がこぼれて落ちる。

こんなにつらい思いをさせていると思うと、トーマも切なくなってきた。

「ごめん、悪い事聞いちゃった。気にしないで。誰にでも言いたくない事ってあるから」

「うっん。いいの。トーマくんには知る権利があるよね」

琴音はトーマのハンカチで涙を拭いた。そして、ゆっくりと右手をトーマの前に差し出す。

「……見てっ」

琴音は手のひらを上に向けると、軽く握った。しばらくしてその手をゆっくりと開く。手のひらの中に小さな空間が出来る。

「なに？」

手のひらの中でふいに空気が揺らめく。そしてぽわっと小さな白い光が生まれた。ゆらゆらと陽炎のようにゆらめく光は小さな炎に見える。トーマは息を呑んだ。

「手を近づけてみて」

琴音に促され、トーマは恐る恐る自分の手を近づける。

「……温かい？」

琴音の手のひらの光から熱が伝わってくる。まるで小さなランプに手をかざしているようだ。琴音は小さく頷き、きゅっと強く光を握り締めた。光は琴音の手の中に吸い込まれるように消えた。

「手品……な訳ないよ、ね」

琴音は右手を膝にこすりつけた。

「今はこの程度しか出来ないけど、時々暴走して、その辺の物を燃やしてしまうの。これが龍の印」

トーマはまじまじと琴音を見つめた。火を吐く龍を祀る神社。その神主の娘。龍の印。トーマの頭の中でジグソーパズルのピースが一つ一つはまっていく。

「赤ちゃんの頃、時々癩癩起こして大泣きすると、きまってその辺の物が焦げたんだった。最初はお兄様のいたずらだっと思ってわれて、お兄様は随分怒られてたらしいの。濡れ衣なのにな。可哀そうなお兄様」

琴音は肩をすくめた。

「三歳くらいの時お兄様と大げんかして……子供部屋を燃やしてしまっただらしくて……。覚えてないんだけど」

琴音はうつむいた。

「それから私を見る周りの目が変わった……。龍の印を持つ子供だつて。お兄様も私のこと、嫌いになった。だって、燃やされそうになつたんだもん、しょうがないよね」

膝の上で握りしめた拳の上に涙がこぼれていく。トーマはそつと琴音の拳を自分の手で包み込んだ。

「……怖くない、の？」

「怖くなんかないよ。全然」

そしてにつこり笑つて見せた。

「世の中には色々な力を持つ人間がいるんだよ。……ヘンな話だけど、僕、結構そつというの慣れてるかも」

「どうということ？」

「うーん、まあ、なんて言つたらいいのか……」

まさかタケルがテレパスだとは言いにくい。タケルも自分の能力を人に知られるのは嫌がつている。いくら親友だつて本人の承諾なしにバラすのはいけないことだ。トーマはうーんと唸りながら言葉を探す。

「上手く言えないけど……例えば、虫とか動物つてさ、すごい能力があるんだよ。言葉を持たないのに、情報を伝え合う手段を持つてたり、地震を予知するとか、人間の病気を察知したり治す力があったりとか。僕、思うんだけど、人間だつてきつと本来はすごい能力を持つてたんだつて。まだ人間じゃなくて動物だつた頃は、そんな能力を皆がきつと持つてたんだ。でも、進化していく途中で薄くなつてきてて、でも、時々、その名残みたいにすごい力を持っている人がいたりするんだと思うんだ。そついうのを超能力とか言うけど、本当はちつとも特別な力じゃなくて、当たり前前の力なんじゃないかつて」

トーマは琴音の目を見た。

「だから琴音ちゃんの力だつて、きつとヘンな力なんかじゃない。

僕、怖いなんてちつとも思わない。どつちかつて言つと、ちよつと

うらやましいくらい」

そう、時々ケルがうらやましいと思うのだ。人間の心ってどうなってるんだろう。動物の心もわかるんだろうか。僕にあんな力があつたら、もつともつと知りたいことがたくさんあるのに。

「やっぱりトーマくん、ちよつと変わってる」

琴音は小さく笑った。

「うらやましいなんて、初めて言われた。そんな風に思う人もいるんだね……」

瞳は涙で濡れているが、明るい笑顔だった。

「なんだか、ほつとしちゃった……。でも、トーマくん、それって私が進化してない動物ってこと？」

「え？ あゝ、もしかしたら、そうかも」

「ひどおい……」

琴音は唇を尖らせる。視線が合う。しばらくしてふつとトーマが吹き出し、二人はくすくすと笑いだした。

笑いながらトーマは心の中で呟いた。

大丈夫だよ、琴音ちゃん。僕は絶対に君の傍にいる。何があっても……。

> 続く <

その頃タケルはというと……。

全力疾走で長い階段を駆け上がり、息を切らしながら本殿の前へとたどり着いた。

「うわ……、すっげえ」

うっそうと生い茂る緑に埋もれるように静かにたたずむ火王神社は、今まで訪れた事のある神社や寺の中で一番古くて厳かな感じがした。

本殿の方からは静かながらも力強いパワーがにじみ出てくるのを感じる。

「……あれか？」

むき出しの岩肌にはぽっかり空いた洞窟を見上げる。あれが龍を閉じ込めた窟というヤツだろう。

「なんか、まじでヤバそう……」
思わずぶるつと身震いする。

本殿の中に目を移すと、大きな黒い木彫りの龍が見えた。しんと静まり返った闇の中で、じっとタケルを窺がっているようだ。思わずぐくりと唾を呑む。

タケルは本殿の前に立つとばんばんと柏手を打った。

すみません。友達を探しに来ただけです。罰を当てたりしないでください。

一応、心の中でお願いをしておく。ここには間違いなく何かがある。それが何かはわからないが。

気を取り直して、辺りを見回した。大きな古い土蔵、狛犬、手水屋、社務所、どこも静かにたたずんでいるように見える。

目を閉じて、大きな深呼吸をし、頭の中のアンテナを外に向かって伸ばしていく。ラジオのチューニングを合わせるように、静まりかえった空気の中に人の気配が強くなったり弱くなったりしながら

タケルの頭の中に響いてくる。

かなりの数の人の気配だ。どうやら社務所の方らしい。タケルはさらに意識を集中した。その中にトーマの意識がないかどうかを必死で探す。

「んんんんん……はああ」

しばらくしてタケルはへなへなとしゃがみこんだ。

「わからん！」

集中しすぎて頭ががんがんする。自分の力を意識してこんな使い方をするなんて初めての事だ。五分が限界だった。

「ちくしょう、俺の力も案外役に立たねーな」

タケルは両手でこめかみを押さえながら立ちあがった。

社務所と本殿の間へと目をやると、生垣が目に入った。竹を編んだ柵とそれほど背の高くない木々が社務所の敷地と境内を仕切っているようだ。

「結局は、身体を張れってことか」

タケルはもう一度大きな深呼吸をした。

「……よっしゃ、行くぞ」

タケルは生垣に向かって走り出そうとした。

途端に、ぐいっと首根っこをひつつかまれて、ずるずると後ろへと引きずられる。

「わああああ？」

いきなり身体が宙を浮き、本殿の前まで吹っ飛ぶ。ひどく尻もちをつき、ぎゃあつと悲鳴を上げながら尻を押さえた途端、今度は身体が地面から浮き上がり、弧を描きながら、本殿の中へと勢いよく放り込まれた。板の間の上をごろごろと転がる。

何が起こったのかさっぱりわからなかった。とにかくしたたかに尻を打って七転八倒である。

「し、尻が割れるう……」

「アホか、お前」

頭上から声が降ってくる。竜介が柱の陰に立っていた。端整な顔

に怒りをあらわにしながら、ゆっくりと歩みより、尻の痛みにした
うちまわっているタケルの胸元をぐいっとなつかんだ。どすの効いた
声で唸る。

「宿に居ると言っただろうが」

「ちよ、ちよっと待った。尻、尻が痛いんだってば……割れる……」
「尻は元々割れてるだろうが！ いや、そうじゃなくて、なんでこ
んなところをちよるちよるしてる！」

「そんな事言われたって、お願い、ちよっと待って……」

タケルの懇願に竜介はしぶしぶ手を離れた。タケルはあうあうと
唸りながら、しばらく床の上で芋虫状態だった。その情けない様子
をあきれてみていた竜介から次第に怒りの波長が小さくなるのが伝
わってきた。

竜介はがっくりと肩を落とす。

「どうもお前という調子が狂う……。悪かったな、加減しないで」
タケルはようやく身体を起こすと床の上に胡坐をかいた。

「で、なんでここに来たんだ」

「決まってるじゃん。トーマの居場所を突き止めるんだよ」

「探偵ごっこじゃあるまいし、ガキがおもしろ半分首つっこんで
んじゃねえ」

竜介は冷たく言い放つ。タケルは唇を尖らせた。

「おっさんこそ、何してるんだよ。情報収集だと言ってだろ。こ
んなとこにいたってなんも情報ないじゃん。木彫りの籠と懇談会し
てんのか？」

「いいか、お前が宿の布団の中でよだれ垂らして眠りこけている間
に、俺は村中で情報収集してたんだ。だいたいなあ！」

竜介は身を乗り出してタケルにかみつきそうになったが、はっと
我に返ったようだった。なんでこんなガキ相手にムキになってるん
だ、俺は……。竜介の困惑がプールサイドの波みたいになタケルに伝
わって来た。

すかしてる割には結構かわいいところがあるのかも知れない。こ

のおっさん。タケルはにまっと笑って見せた。竜介の困惑がますます大きくなる。

「なあ、おっさん」

タケルは座りなおして正坐になった。

「ガキガキって言うけどな、俺、テレパスなんだぜ？　ここからでもあの建物の中にいる人間の気配がある程度わかる。時々トーマとゲームしてるんだ。トーマが俺に意識を飛ばして、それを俺が読むっていう。トーマの意識なら、俺、多分すぐ見分けられる」

竜介は黙って聞いている。

「俺なら身体が小さいから、その辺の隙間からでも中に入れるし、隠れるところもいっぱいある。中に忍び込んで様子調べられる。役に立つぜ？　お買い得だと思っただけだな」

「……」

「なあ、おっさん。一平って人の代わりに、俺とコンビ組んでくれよ。今だけでいいから」

竜介はサングラス越しにじっとタケルを見つめていたが、ふいに口を開いた。

「本気か？」

「うん」

しばらく考え込んでいたが、竜介は小さな溜息をついた。しょうがねえなあ……という声が響いてくる。

竜介はポケットから小さなイヤホンのようなものを取り出した。

小さなマイクのようなものがついている。

「これを耳にかける」

タケルはおずおずと受け取ると、右の耳にかけた。イヤホンと違うのはコードがついていないところだ。

「無線みたいなものだ。声も勿論伝えられるが、お前の意識は俺のコレで受けることが出来る」

竜介は自分のサングラスを指さした。タケルは目を丸くしながらにじり寄り、身を乗り出して竜介のサングラスを覗きこむ。

「すっげ〜。これ、サングラスじゃないの？」

「サングラスとしても使ってるが、受信機だ。お前が放つ思考が変換されて俺のところへ届くようになってる。言ってみればテレパス仕様の無線機だな」

「すげ〜、すげ〜！ どうなってるんの？」

「説明したところで、お前にわかる訳ないだろうが。時間の無駄。

……おい、なんでもいいが、離れてくれ」

竜介は迷惑そうにタケルを押しつけた。他人に接近されるのは慣れていないようだ。

「うちの開発部門の力作で、普段は一平が使っている。東京に戻るのに置いて行きやがった」

もしかしたら、こういう事態を予想していたのかもしれない。竜介は苦笑いを浮かべた。あいつは優しそうな顔をしていて、案外人が悪い。だいたいテレパスというのは何を考えているのかよくわからない。この犬ころみみたいな少年も含めて、だ。

「すっげ〜！ アニメみたいじゃん！ うっは〜、こりゃ〜、ヤバいっすよ」

その犬ころみは目を輝かせている。まるで新しいボールを見せられた柴犬だ。

「アニメとか言うな」

竜介は渋い表情になる。だからガキは嫌なんだ。

「まあ、そう言うなって」

タケルは嬉々としてイヤホンを耳に押し込んだ。気分はすっかり特撮ヒーローだ。そんなタケルの頭を竜介はガシツと鷲掴みにした。無理やり自分の方に顔を向けさせる。

「その生垣の向こうは庭園になっているはずだ。身を隠す場所には事欠かない。いいな、絶対に建物の中には入るなよ。わかっている。琴音とトーマはともかく、お前は捕まったら殺される可能性もある。その時は責任取らんぞ。……いいか、俺達みたいなダークウオーカーに人権はないと思っておけ」

竜介は厳しい口調でそう言いながら、まっすぐにタケルを見た。

「ダークウォーカー？」

確か昨日もそんな言葉を聞いた。

「ダークウォーカー、闇を歩く者。俺達サイキックの事だ。公安調査庁の組織内ではそう呼ばれている。俺達はこの力故に闇に生きているようなものだ。……生き延びるために自分の力を使おうと思うなら、お前も覚悟しておくんだな」

タケルはきよとんとした顔で竜介を見つめた。竜介が薄く苦笑いを浮かべる。

「そのうち嫌という程、思い知らされる時が来る……」

暗い重い感情の波がざわざわと広がる。が、すぐにその波は消えた。竜介は一瞬にして気持ちを切り替えたようだ。そしてタケルの腕をひっぱり、本殿の裏手へと連れて行く。

「俺はこの辺りにいる。指示はその都度俺が出す。痛い目に会いたくなければ、指示に従え。いいな」

「うん」

タケルは大きく頷いた。身体の奥に静かな高ぶりが生まれてくる。

この緊張感は試合の前の感覚によく似ていた。

どこかでキックオフのホイッスルがなったような気がした。

「行け」

竜介の声を合図に、タケルは外へと飛び出していった。

> 続く <

火龍教 & l t ; ; i & g t ; ; (前書き)

囚われの身となったトーマと琴音を救うために夕ケルは火王神社内へと潜入した……。

鳥居の下に一台のタクシーが到着したのは昼前の事だった。中から出てきたのは一人のスーツ姿の青年だ。色白でほっそりした顔立ちはどこことなく琴音と似ている。切れ長の目もとは静かだがことなく人を拒絶するような鋭さをたたえていた。

ゆっくりと参道を進み、長い石段を登っていく。

息を切らす事もなく石段を登り切ると、本殿に向かって一礼した。

「ただいま帰りました」

そしておもむろに社務所の方へと歩みを進める。

この青年が琴音の兄、笙^{しやう}である。

笙は玄關の扉をゆっくりと開けた。中に入ろうとして、動きが止まる。

母が亡くなり、自分が修行のために家を空けている間、ここにいるのは根岸と古くから住みこんでいるまかないの家政婦の二人だけのはずだ。家の中は時が止まったように静まり返り、空気の流れさえ滞る、そんな状態のはずなのに……だ。

空気が暖かい。台所から煮炊きする匂いが流れてくる。足元を見ると、靴がずらりと並んでいた。かなりの人数だ。ざっと見ただけでも二十人は下らない。

「おかえりなさい、笙さん」

奥から根岸が出てきた。

「ずいぶんとたくさん人が集まっていますけど」

笙は目をわずかに細めた。根岸に対する不信感がにじみ出ている。

「今日は相続の事務処理って話じゃなかったんですか？」

「そうですね。相続の話です」

根岸の頬に薄い笑いが浮かぶ。

「まあ、上がって下さい」

根岸が促した。笙は眉をひそめる。気に入らない。自分の家に帰

つて来て、何故他人に上がって下さいなどと言われなければならぬのかと、笙は心の中で呟く。

廊下を歩き、大広間の襖を開けた。思わず立ちつくす。

「……なんです、一体」

大広間には大勢の人がいた。長机が並べられ、そこでそれぞれが昼食を取ったり喋ったりしている。異様なのは全員が黒装束に身を包んでいる事だった。酒が入っているのか、声高にしゃべる男達が多い。

笙の存在に気付いた一人が大声で笙の名を呼んだ。

それを合図のようにその場の全員が一斉に笙の方を見た。

いきなり水を打ったように静まり返る。

笙は言葉を失った。

目の前に並んでいる顔がじつと笙を見ている。古くからの氏子もいたが、ほとんどが見た事のない顔ぶれだ。それも若い。神社に入りする古い氏子であればおおかたが高齢のはずだが、ここに集まっているのは若い者が多かった。その視線は一樣に冷ややかで、中には明らかに敵意を浮かべているものもあった。

笙は寒気を覚えた。

「彼が真山笙。琴音さまの兄上だ」

根岸が冷ややかな笑いを浮かべながら笙を紹介する。

「……どういう事です。なんですか、この人達は！」

笙はきつと根岸を睨みつけると、語気荒く迫った。

ざざざつと畳のすれる音が響き、笙の近くにいた数人の男達が一斉に飛びかかった。

「なにをする！」

必死であらがつたが、相手が多すぎる。あつという間に腕をねじあげられ、畳の上にねじ伏せられた。頬が歪むほど強い力で頭を畳に押さえつけられ、笙は呻いた。

「根岸……」

笙は歯を食いしばりながら唸る。その様子を見て、根岸は声を上

げて笑いだした。

「手荒な真似はしたくなかったんですけどね。でも、どう考えてもあなたがうんとは言わないだろうと思つて」

根岸は笑うのをやめると、笙の目の前にしゃがみこんだ。

「火龍教は変わるんです。こんな山奥の、古ぼけた、朽ち果てた民間信仰ではなく、もっともっと現代の人間が切望する、強い魔力を持った宗教にね」

そして笙の細い顎をぐいっと掴んだ。

「火龍教に必要なのは、伝統とか、宮司とか、そんなカビの生えた古い文化じゃない。人の心をひきつける、強力な力だ。そう、怒りの炎、復讐の炎、全てを焼き尽くす炎。その炎を操る、龍の力そのもの」

「琴音……か？」

呻くように笙が呟く。瞳に激しい怒りが燃えている。

「もしあなたに火龍の力があれば、今頃あなたが新生火龍教の教祖となつていてでしょうに。残念ですよ。今後あなたは火龍教から手を引く。神職につくのはあなたの勝手だが、よその神様に仕えるんですな。ここには必要ない人だ」

「勝手な事を！ ここは僕の家だ。真山家のものだ」

「あなたは大きな勘違いをしているようですね」

根岸は再び声を上げて笑った。

「先代も、鈴子さんも、そういう事にはトンと疎かったからねえ。

ここはね、既に真山家のものではないのですよ。火龍教の所有物なんです。言ってみれば、真山家は居候いこう。だから、あなたはなんの権利も主張することは出来ない」

「根岸！」

笙の身体が怒りで震えている。

「いやあ、準備にずいぶん長い事かかりました」

根岸は満足そうに笑いながら、笙を見下ろす。

「十年かかりましたよ。十年」

根岸は感慨深そうな表情を浮かべた。

「今日はその仕上げの日です。記念すべき大イベントがあるんですよ。新生火龍教としての記念すべき最初の儀式がね。あなたにはそれに同席してもらって、世代交代をしかとその目で確かめてもらいましょうか。それまではゆっくりくりくつろいでいてくださいよ。久しぶりの実家ですからねえ」

そしてくいつと顎でしゃくる。連れて行けという事だろう。笙は無理やり立ちあがらされる。抗って暴れると、誰かが笙の腹に膝を叩きこんだ。笙は呻きながら身体を折り曲げる。そして、引きずられるようにして部屋から運び出された。

笙の根岸を罵る声が遠ざかっていく。それを聞きながら根岸は満足そうに広間の面々に向かって叫んだ。

「さあ、忙しくなるぞ。儀式の準備を進めましょうか！」

おおっという賛同の声が湧きあがる。そして広場の喧騒はますます大きくなっていった。

> 続く <

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1190y/>

タ・ケ・ル

2011年11月22日03時14分発行